
魔法少女リリカルなのは ～ある少年の魔法的な日々～

曇天営業人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～ある少年の魔法的な日々～

【Nコード】

N8525K

【作者名】

曇天営業人

【あらすじ】

高町なのはの双子の弟、高町春季は普通の小学三年生。しかし、青い宝石の導きか、はたまた神様の悪戯か色々な騒動に巻き込まれていく。

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

オリジナル主人公やオリジナルの展開、独自の解釈などがあったりしますので、苦手な方はご注意ください。

ネットに公開するのは初めてなので、変な所や直した方がいい所などがありましたらどうぞんどん教えていただけたらありがたいですm(____)mもちろん感想も大歓迎です。

プロローグ

そこは現実と幻想の境が曖昧になってしまった場所だった。

いつもなら小鳥や虫の囁りが聞こえるであろう草木が生い茂る森は奇妙な静けさで満ちている。

外界との接触が断たれたような空間は赤い色に覆われていた。

そしてそんな森の中を疾る黒い塊の姿があった。

茂みに隠れ、塊は自分を追う追跡者を息を潜めて待った。

少年は捜していた。

自分が見付けたせいでこの世界に撒かれた災厄の種を。

少年は追っていた。

種がその力を使って出現してしまった黒い異形を。

彼が纏うマントと民族衣装らしい服が風ではためく。

荒い呼吸を繰り返す怪我をした腕を庇いながら、視覚と魔力による探索をせわしなく続ける。

そしてその時はすぐに訪れた。

少年の真横の茂みから覗くのは爛々と燃える赤い瞳を持つ黒い塊。

見る者に嫌悪と恐怖を与えるであろうその姿を前に、少年は小さな手に握りしめていた赤い宝石をかざした。

宝石から輝く赤色の光りが溢れ出す。

それは彼が使う魔法を現実へ顕現させるための補助機械　　デバイスと呼ばれる物だった。

幾重にも連なる緑色の光りの紋様が少年の伸ばされた腕の前に現れ、魔法陣を形どる。

その腕を片手で支え、彼は呪文を唱える。

「冴えたる響き光となれ、許されざるものを封印の環に！ ジュエルシード封印！」

少年に呪文の終了と同時に飛び掛かってくる黒い塊。

魔法によって生じたまばゆい光と黒い塊のぶつかり合いになる。

幻想的な光景だが、光と塊が拮抗したのはほとんど一瞬だった。

赤い光に阻まれた塊は粘着質な音と共に身体の一部を撒き散らした。小さくなった身体ではさすがに不利と判断したのか、塊は茂みの奥へと去ってしまう。

しかし少年の代償も少なくないうだ。

膝をつき、少年は塊が去った方を朦朧とする意識の中で呟いた。

「逃がし、ちゃった……追い掛け、なく、ちゃ」

そしてついに力尽きた少年は雑草の上に倒れ込んでしまう。

最後に残った力を振り絞り、心の中で祈る。

誰かに伝わるように、届きますようにと。

(誰か、僕の声聞いて……力を貸して……魔法の、力を……)

少年の身体が光に包まれる。

やがてその光が晴れた後、最後に残ったのは赤い宝石と小さな動物一匹だけだった。

第1話 始まり？

変な夢を見た。

夢を見たといっても内容を事細かく覚えている訳ではない。漠然とした奇妙さと、気持ち悪いほどの現実感。

声が聞こえた気もするが、途切れ途切れでイマイチ要領を得ない。声がどうとか、魔法がなんとか。

んん……。と小さく唸りゆっくりと脳の覚醒を促し、少年 高町 春季はやがて、わずかに痛む頭を抑えた。そして夢なんて変なのがほとんどだよと一人納得する。

「夢は夢だよね」

その言葉に出し、それを忘れることにする春季。切り替えが早いというよりも忘れっぽいのが彼の長所であり短所でもあった。

ふ、と時計を見るといつもの起床時間を過ぎていた。いつもなら朝食の支度をしている母を手伝うのだが、今日は終わってしまっただかもしれない。

彼と双子の姉が通う真っ白で目立つ私立聖祥大学付属小学校の制服に着替え、春季は自分の部屋を後にした。

高町家の朝は早い。

早朝から代々伝わる剣術の訓練に行く長男である恭也と長女の美由希はもちろん、喫茶店のマスターをしている大黒柱である士郎。

そして高町家を支えるもう一人、高町桃子はそんな彼らより少し早

目に起きて掃除と洗濯などをするのが日課だった。

家事をこなしながら起きてきては訓練に向かう子供達と挨拶を交わし、朝食の支度を始める。

いつもならこのくらいに起きてきて支度を手伝ってくれる末っ子が来ない事に内心で残念がり、手慣れた手つきで朝食を作り上げていく。

「おはよう。お父さん、お母さん」

それが一段落した所で高町家の次男、春季が珍しく寝ぼけ眼で挨拶をしてくる。

士郎に似た黒髪と優しげな顔の造形は双子の姉のなのはよりも兄の恭也に似ていた。

春季の将来は恭也のようになるかもしれない。

美由希や士郎とそんな話を話したのを思い出して一人微笑む。

そして挨拶を返すのも忘れない。

「おはよう、春季。今日はお寝坊さんね」

「おはよう、春季」

春季がキッチンに行くと、母である桃子とテーブルには新聞を読む父、士郎がそこにいた。

まだ二十代でも通じそうな容姿と暖かな笑顔を浮かべる桃子。

そして士郎も剣術家として完成された引き締まった身体は年を感じさせない若々しいお父さん。

この両親は春季はもちろん他の兄弟にとっても自慢の両親だ。

二人と挨拶を交わし、桃子の言葉に苦笑いでちょっとね。とだけ返

し脱いだパジャマを脱衣所まで持って行く。
そのついでに洗顔などをすませていると耳に届く足音。
やがてそれと共にドアが開く音が聞こえた。

「あ、おはよう。はる君！」

「ん……。おはよう、なのは」

満開の向日葵のような笑顔で挨拶をする女の子は高町なのは。
春季の双子の姉で、何かと彼の世話を焼きたがるのは春季の背が僅かになのはよりも低いからか、単純にお姉さんぶりたいのか。
……あるいはその両方かもしれない。

彼女のトレードマークともいえるいつもは頭の両サイドで括られた栗色の髪の毛は今真っ直ぐ流しており、今から身支度をするらしい。

鏡の前を譲り、春季は濡れた顔をふかふかのタオルで拭いた。

「もう、なのはじゃなくてお姉ちゃんって呼んでっば〜」

「えっと、だって恥ずかしいよ」

「美由希お姉ちゃんの事はお姉ちゃんって呼んでるのに？」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんだけど、僕達は双子だよ？」

呼び方についてはこの双子にとって永遠の議題だ。

一日一回は繰り返される会話は、訓練が終わった恭也が来るまで続けられた。

日課ともいえる会話を終わらせると朝食の時間だ。

そしてこの時間もある意味、日課、といえるのかもしれない。

結婚して幾年過ぎても新婚気分です料理の味を褒める士郎と照れる桃子。

美由希の制服の曲がったりボンを直してやる恭也。

一組は思わずされるがままでいいのかと問い詰めなくなる光景だが、他の皆は自分達の世界に浸っているので気にした様子もない。

そこまで考えた所で春季は自分の食事そっちのけで春季のトーストにマーガリンを塗る姉を見てありがたくとも困ったものだ。とミルクがたっぷり入ったカフェオレを飲む。

「はい！ 出来たよ、はる君」

「あ、ありがとう」

ニコニコしているのはからトーストを受け取り、それにかじりつく。

独特の甘味と風味を噛み締め一言おいしいよと告げると、それを嬉しそうに確認してから彼女も自分の食事に取り掛かるのだ。

他人が見たら自分で塗れとも思うだろう。もちろん春季自身もそう思うし、何度か自分で出来るといってトーストを奪った事はあった。

あったのだが……泣かれた。

泣かれてあたふたしていると恭也からはなのはを泣かすなといわれ、その様子を見た他の家族は『あらあら』『まったく仲がいいな』『女の子を泣かしちゃダメだよ？』などと笑いながらその光景を眺めていた。

その上、その日一日はなのはの機嫌が悪く、不審に思ったなのはの親友達に訳を話すと金髪少女からは呆れられ、紫色の髪をした少女からはやんわりとした慰めの言葉を頂戴した。

それから親切でしてくれているのだしトーストにマーガリンを塗るくらいは……と現状に甘んじている。

人からは優しいとも流されやすいとも評される春季だが古今東西、

女の最終兵器涙に勝てる男はいないのだ。

まだ九年しか生きていない彼にそれを単独で攻略せよと命じた所で
どうにも出来る訳がない。

早くも女性から尻に敷かれそうな将来を想像し、春季は頭を振って
その想像を脳内から追いやった。

第2話 日常？

「行ってきまーす!」

「行ってきます」

朝ごはんを食べ終わった私達はお家を出て学校へ行くバス停に向かいます。

「そういえば今日のはる君も起きるの遅かったみたいだね」

はる君はお母さんのお手伝いをするために早起しているのですが、今日は私と同じくらいに起きたそうです。

そのことを尋ねると頬をかきながら苦笑しています。

「ちょっと寝坊しちゃっただけだよ」

「ならいいけど、夜更かしなんかしちゃだめだよ?」

お姉さんとしてはる君が不健康な生活するのは絶対に許せません!
言葉にしなくてもいいことは伝わったのか、はる君はわかつてるよと笑顔でいつてくれました。

これで一安心です。

「おはようございまーす」

バスの運転手さんに挨拶をして私はお友達を捜します。

「なのはー、ハルー、こっちこっち!」

探すまでもなく私とはる君を呼ぶ声が聞こえます。

一番後ろの席で私達に向かつて手を振る二人の女の子、アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃん。
綺麗な金色の髪の毛でいつも元気なアリサちゃんと、おしとやかで物静かなすずかちゃんは一年生からのお友達です。

「おはよーアリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう、バニングスさんに月村さん」

挨拶をして私はアリサちゃんとすずかちゃんの間、はる君は一つ前の席に座ります。

隣の男の子はお友達なのか、いつもは大人しいはる君も楽しそうにお喋りしてます。

私達とはる君はクラスが違うのでたまに知らない子といるのは仕方ないけど、少し淋しいです。

「ハルったらせっかく場所をあけてたのに」

「はるき君もお友達といたいんだよ、アリサちゃん」

不機嫌そうに呟くアリサちゃんをすかさず、すずかちゃんがフオロ

！。
私としても一緒に座りたいけど、はる君にははる君のお付き合いがあるので我慢です。

「仕方ないわね。そのかわりお昼は付き合っただ貰わないとね。ハルもいいでしょ？ 授業が終わったら行くから待ってなさいよ」

ニヤリと笑ってはる君の頭上に問い掛けるアリサちゃんに私とすずかちゃんは揃って苦笑いするしかありません。

それははる君も同じのようで笑いながらいいよと答えていました。

一緒にお弁当を食べるの楽しみだなあ。

無機質なチャイムが鳴り、学校中に授業の終了を告げる。待ちに待った昼食時間の訪れに子供達の表情は明るい。

「高町君、一緒に食べない？」

「ごめん、今日は上に行かなくちゃいけないんだ」

「そっか。ならしょうがないね」

仲のいい友達から誘われ、春季は申し訳なさそうに頭を軽く下げた。上に行くというのは屋上で昼食を取るなのは達と一緒に食べるという意味で、友達はすぐに理解を示し別の友達の所へ。

一年生の頃から週に二、三日ほどはこのような事があるのですっかり慣れてしまったようだ。

それは春季も一緒に、最初は女の子と食べることには気恥ずかしさがあったものの今では特に何か感じる訳でもなく普通に食事と会話を楽しめる。

弁当箱を取り出しいつの間にか教室の前で待っているのは達に苦笑しつつ、春季は立ち上がった。

今日も眩しすぎる日光が屋上を照らしていた。

いつものようにベンチの一角に春季、なのは、アリサ、すずかの順で腰を掛け自分の弁当に舌鼓を打つ。

「将来の夢？」

いつもの如くアリサを中心に会話が展開する中、降って湧いた話題に春季はそのまま問い返した。

話題を振ったアリサはおにぎりを食べていたので視線を隣にいるな

のはに向ける。

「今日の授業でそういう話しがあったの」

「はるき君は何か夢はある？」

「うーん……」

すずかに聞かれ思わず唖る。

まだ三年生だしと今まであまり考えたことがなかった。

漠然と家族が経営をしている喫茶店、翠屋を継ぐというのも浮かんだがそれだけではちよつと面白くない。

だからといって明確なビジョンが見えてくる訳でもなく、必然的に春季はわずかに考えた後に当たり障りない返事をする。

「まだ特にわからないかな」

「そっかあ」

更に続く会話を聞き流しつつ、何かないものかと春季は思考に没頭する。

確かにお菓子作りは趣味で、翠屋のパティシエをしている桃子から教えてもらっている。

腕前は小学生にしては中々のものだが、自分自身では一向に上達が感じられないのが目下の悩みか。

といつても対象比較が有名ホテルで腕を振るっていたこともある桃子なので、その悩みすら十年早いといった所だろう。

そして思う。

(翠屋も楽しそうだけど……どうせなら)

「自分の店を持つてみたいなあ」

「どうしたの？」

どうやら声に出していたらしく、近くにいたのはさすが。

その後ろでは何がどうなったかはわからないが、なのはとアリサが戯れていた。

すずかも苦笑しているし、一応は止めようとしたのだろう。

まあ、結果は一目瞭然だが。

それは無視してすずかに視線を戻す。

「夢のことだよ」

「何か見付かったの？」

「ちよつとだけ、かな？」

「ふふ、変なはるき君」

顔を合わせて二人で笑い合うが

「ひたひ、ひたひひよ、ふありふあひゃん！」

「くだらないことというのはこの口!？」

どうも笑ってばかりもいられないようだ。

もはや阿吽の呼吸で二人は徐々にエスカレートしていくアリサとバタバタもがくなのはを助けるべく立ち上がった。

春の日差しが暖かいそんな日常の一コマの中。

戯れ終えたなのはの瞳はどこか遠くを見ていた気がした。

第3話 フェレット？

春季達は走っていた。

理由は単純に塾に遅刻しそうだから。同じ塾に通う四人だがクラスが別々だからこそその弊害が発生する。

いわゆる『帰りの会』の長さが違うのだ。

もっぱら春季のクラスが遅くなることが多いので、先に行つていいというがなのはが頑なに譲らない。

『途中で事故とかに逢うかもしれないよ！』

これが彼女の主張であり、なのはが待つなら私もとアリサとすずかも待つてくれている。

春季にしても待つていてくれるのは心苦しくもありがたい。

運動があまり得意ではないのはと手を繋ぎながら、春季は先を走るアリサ達を追う。

「は、はる君、恥ずかしいよーっ」

「ごめんね、でも、我慢して」

春季は父達譲りの抜群ともいえる運動神経を持っているのだが、なのはは受け継がなかったようで。

手を繋ぐ羞恥からか頬を赤く染め、息も絶え絶えなのはの抗議を却下してちらりと様子を伺う。

すでになのはの限界が近いようだ。

春季は一息置き覚悟を決める。

それは彼が誇るリーサルウエポン。

その威力は互いに絶大。

一度使えば三日は使用出来ない』とっておき』を使う時が来た！

「もう少しだからね、頑張つて お姉ちゃん」

「うつつ……！？」

たちまち硬化していたなのは表情が溶けたチーズのようにとろける。

春季だけが使えるなのはを元気にする』とっておき』は、自分にさえ致命傷。

一度使えば三日は使用したくない……主に羞恥心的な意味で。

春季の顔が真っ赤になるが、なのはが元気になったので今だけは気にしないことにする。

「つて、あれ？」

なのはから視線を前に戻した春季は不思議そうに首を傾げる。

先を走るアリサがこちらを見ていた気がしたが……

(気のせい、かな)

一方、後ろを走っている春季となのはをちらちら伺っていたアリサだったが、春季と視線がぶつかり我に返る。

(べ、別に私はなのはとハルが仲いいなって思ってただけで！

そうよ！ 私はこれっぽっちも何とも思っていない！)

素晴らしい高速思考で沸いて来る羞恥心を打ち消し、顔が赤いのは

夕日のせいとありがちな言い訳を自分にいい聞かせるアリサ。
そして前を見据え、ふと見覚えのある道にある近道を思い出して立
ち止まった。

「ストオーツプ！」

「どうしたの？ アリサちゃん」

「疲れたの？」

「私は、はあっ、もうくたくただよお……」

「あっ、大丈夫？ なのは」

春季はズボンのポケットから清潔なハンカチを取り出し、へばって
いるなのはの額に当てて汗を拭ってやる。

「ありがとー、はる君」

「どういたしまして」

一通り拭いてからハンカチをポケットへしまふ。
なぜか拭いている間は彼の背筋が冷たくなっただが、それは置いて
おく。

「……そこ、脇道があるでしょ？ ここを通ればかなり時間短縮出
来るはずよ」

ちよつと不機嫌そうなアリサにいわれて三人は木が繁る脇道を覗く。

「ちよつと暗いね」

すずかの少し弱気な声になのはも同調する。

「大丈夫よ。ちょっと道は悪いけど……遅刻するよりはいいでしょ？」

そういわれれば納得するしかないのか、二人は頷いた。

どちらかといえば急がば回れ主義の春季としては普通の道を行きたい所だが、アリスにいつても勢いで流されるだけだろうし、すでに彼女達は先に進んでしまっていた。

仕方なく歩を進めるが、この道を通りたくないのにはもう一つ訳がある。

どこかで見た気がするのだ。

ほの暗く、夕方なのにも関わらず町の喧騒から隔離されたようなこの場所を。

(耳鳴りまでしてきた……)

背中に落とされた冷たい水がゆっくりゆっくり這うような、そんな気持ちの悪さと耳元と頭に直接響くようなノイズ。

それらが重なって発生した背筋の震えに、春季は思わず自分の腕を摩った。

見れば前を行くのはも呆然と、いや、よく見ればどこか切羽詰まったような表情で立ち尽くして

「っ!？」

いたかと思えば走り出した。

急な動きに思わず混乱し、あの運動音痴でさっきまでへばっていたのはが彼女らしからぬスピードで行ってしまったことに更に脳内

の混乱は拡大する。

鳩が豆鉄砲どころか機関銃を喰らったような表情で春季は、とりあえずなのはとなのはを追って行ったアリサ達を追い掛けた。

「あつ、はるき君」

「はあつ……はあつ……あれ、なのはとバニングスさんは？」

一直線に走って行った先で待っていたのはすずかだった。

走って乱れた息を整え、春季はこの場にいない二人の行方を聞いた。

「それがね、小さな動物が怪我をして倒れてたの。それで病院に連れていこうって」

どうやらすずかはその時にいなかった春季を待っていてくれたようだ。

お礼の言葉をいうと、すずかは気にしないでと行って微笑んだ。

すずかに案内された動物病院につくと、すでに何らかの処置が取られたようで入口でなのはとアリサが獣医らしき女性に頭を下げていた。

遅いとアリサに叱られる春季だったが、なのはとすずかによって宥められ、詳しい話しは後でということになった。

耳鳴りはいつの間にか止んでいた。

あのフェレットさんどうする？

家は犬がいるから危ないかも

私の所も猫がいるから……

なんとか間に合った塾の時間。

その講義中に一枚の紙によって進められる筆談とそれに付随する個人的な絵を眺めながら、春季はぼうつと考えた。

高町家は飲食店を営んでいるので衛生的に動物は飼えない。

もちろんそれはなのも承知だろうし、春季も 動物好きな春季にとっては何かが不満だったりするが とりあえずは納得している。

(無理だよなあ)

そんな中、双子の姉は何を思ったのか紙に私が頼んでみると書き足した。そして向けられる三対の不安げな視線。

結局、そんな視線に耐えられず春季はしょうがないか……と消極的ながらも自分も説得に参加すると表明するのだった。

その際に春季が想像で書いた極めて独創的なフレットの絵は三人娘を笑いの渦に叩き込み、塾の講師から注意された事をここに記す。

そして夜の高町家。

難航するかと思われた説得は意外なほどすんなり 幾つかの条件付きだが 受け入れられた。

条件といっても要約すれば『ちゃんと二人でお世話すること』だけだったりする。

当然なのも春季もそれを承諾して、めでたく高町家で引き取ることに決定した。

「そうそう、カスタードクリームは焦げないようにきちんと混ぜるの」

「はい！」

晩御飯もお風呂も終わると、春季は日課になりつつあるお菓子作りを桃子に教わっていた。

今日の課題は翠屋でもお馴染みのカスタードクリームだ。お菓子にはよく使われるカスタードクリームだが、中々奥が深い。分量のさじ加減一つで味わいがまったく違うのだから。

といってもこれはお菓子に限らず、どの料理でもいえることだが。実際にここ数日はカスタードクリームの練習をしているが、一向に合格は出ていない。

最初の頃は楽しそうに見物していたのはも、最近は作業中にあまり相手をしない春季に不満があるのかすでに自室に戻ってしまった。

熱心に火にかけた鍋の中で丁寧に混ぜられるカスタードクリームは見た目、香り共に今までにないくらいの出来栄えだ。練習の成果が出たことに内心で喜ぶ。

耳鳴りと共に頭に声が響いたのは、そんな時だった。

(ボ……………ス……………)

「あ……………」

「どうしたの？ 春季」

鍋のカスタードクリームを混ぜる手を急に止めた春季を不思議に思ったのか、様子を見ていた桃子が問い掛けた。

「んつと、いや、なんでもないよ」

「そう、ならいいんだけど」

詰まりそうになる言葉を何とか口にし、春季の心にいいようのない恐怖と不安が押し寄せる。

(あの声はなんなんだろう)

もしかして自分の頭はどうかしてしまったのだろうか。
不安定な状態で作ってしまった最高傑作になるはずだった失敗作の
処理を終え、心配する桃子に大丈夫だからと告げて自室へと戻ろう
として、

「あれ？」

自分の隣室　なのはの部屋のドアが開いていることに気付く。

珍しく思いながらドアを閉めようとした時に、ふと部屋の中が見え
た。

「え……なのは？」

ベッドの上に、誰もいない。

いつもならばぐっすり眠っているはずなのはの姿がない。

さつき着ていたはずのパジャマが散らばっている。

トイレか？

いや、ならわざわざ着替えるはずがない。

不安な心に追い打ちをかけるような出来事に、春季は気が動転した
まま近くの部屋に飛び込んだ。

勉強中だったらしく、机に向かってノートとにらめっこする兄に捲
し立てる。

「きよ、恭也兄さん！」

「む……春季か。どうしたんだ？」

「ベッドがいなくてなのはだけで！」

「……落ち着け、春季。まずは深呼吸だ。出来るな？」

恭也の言葉に頷き、深呼吸を繰り返す。

すうー……はぁー……

「ごめんなさい、少し落ち着いた」

「よし、ならどうしたのか話せるな？」

「うん……。今、なのはの部屋を見たら、なのはがいなかったんだ」
「……そうか」

春季の予想に反して恭也の反応は落ち着いたものだった。

「そうかって、こんな時間にいないなんておかしいよ！」

「ああ、わかっている」

「わかっているなら」

「安心しろ。さっき美由希と二人で買い物に出掛けただけだよ」

「えっ、お姉ちゃん？」

返ってきた意外な答えに緊張が解けるのがわかる。

「よかったあ……」

「安心したなら、もう眠れるな？」

「あ、うん。大騒ぎしちゃってごめんなさい」

ぺこりと下げた頭を恭也に優しく撫でられて、春季は感じていた不安すら忘れ、今度こそ自室のベッド入るとすぐに睡魔に身を任せた。

出掛けたはずの美由希と話す兄と、一足先に運命が始まったなのはのことなどは知らずに

第3話 フェレット？（後書き）

仕事終わりに書き貯めていた第三話を投稿しました。ストックもなので急いで執筆しております、遅くても一週間以内には投稿したいと思います！

出来るかなあ……

しかし、携帯だからか文字を結構打ったつもりでも全体の量は少ない目になってしまいました……。

これは今後の課題としていきますので、またお時間がある時にでも読んでいただければ幸いです。

本文を少し修正しました。

第3・5話 魔法少女が生まれた日？（前書き）

閑話ということで短めな話を投稿しました。

第3・5話 魔法少女が生まれた日？

高町なのはがその声を聞いたのは、夢の中で聞いたのを含めると都合三度目だった。

夕食の席で拾ったフェレットを預かりたいと話し、意外に呆気なく許可してくれたのは幸いだった。

春季と顔を見合わせて喜び、彼女は自室にてアリサとすずかにメールを送っていた。

「送信、つと」

携帯電話を充電器に差し込み、彼女はぼすんとベッドにダイブする。明日の放課後にアリサやすずか、そして春季と一緒に迎えに行こう。楽しい想像に胸を膨らませていた時だ。

はつきりとした声が頭の中に響いたのは。

（この声を聞いている貴方）

「えっ　？」

自然に流れ込んでくる声を聞いている内に普段着に着替えた彼女は家を飛び出していた。

「はあ……はあ……」

導かれるように辿り着いたのは数時間前にフェレットを預けた動物病院。

頭に走る痛みを堪え、電気が消えた暗い病院を塀の外から覗いてみる。

「うーん……」

よくわからない。

仕方なく塀の内側へ入った所で病院の中から何かが倒れる音が聞こえてきた。

激しい音に驚くのもつかの間、開いていた窓から飛び出てくる小さな動物とそれに続くように出てきた大きな黒い塊に、なのはは息を飲んだ。

「あれはっ！」

慌てて後を追いつけた先には彼女にとっても信じられない光景だった。

轟音と共に薙ぎ倒される木。

その根本には先ほどの黒い塊、そして今にも地面に激突しそうな折れた枝の上にはあのフェレットが乗っていた。

体は無意識の内に動いていた。

両手を広げフェレットが跳んでくるのをなんとかキャッチし、なのはは思わず尻餅をついてしまう。

「なになに、一体なにいつ!?!」

動転した思いを吐き出すように疑問を言葉にする。

その言葉に応える声は意外な所から聞こえてきた。

「きて、くれたの？」

「……」

状況の分析開始。

ここに居るのは誰？

私、そしてフェレットさんと黒いモノ。

どこから聞こえてきた？

私の手元から……分析終了。

「喋ったあつ!？」

思わず放り投げてしまいそうになる腕をなんとか制御し、抱えたフェレットを見つめ　まだ安心できる状況ではないことを思い出す。――まず逃げなければ。

そう判断したなのはフェレットを抱き抱えて一目散に逃げ出した。

自分の身に起こっていることをどこか夢のように感じながら、なのは電信柱の陰に隠れていた。

黒い塊に追い付かれた時はどうなるかと思いはしたが、彼女はなんとかどこも怪我することなくいた。

しかし、フェレットが話したこともそうだし、そのフェレットから聞いた話もまた荒唐無稽なものだった。

魔法の資質だとかここじゃない世界から来たとか。

とは思った所であんなうごめく黒い塊に襲われたら嫌でもそれを現実と認識してしまう訳で。

現実には小説より稀なりとはよくいったものだ。

だからこそ、ここで死ぬ訳にもいかない。

フェレットから渡された赤い宝石を握りしめる。優しい温もりがした。

「いい？　行くよ!」

フレットの声になのははしっかり頷いた。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「えっと、契約のもと、その力を解き放て」

宝石がドクンとなった気がした。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

二人の声が重なる。

『この胸に、この手に魔法を！ レイジングハート、セットアップ！』

『stand by ready set up』

宝石から聞こえてくる女性の声と共に立ち上る桃色の光。

その光は彼女の身に宿る魔力。

フレットはその光景に呆然となるが、すぐに首を振って次の指示を出す。

「落ち着いてイメージして！ 君の魔法を制御する杖を、そして身を守る強い衣服を！」

「え、ええと、急にいわれても」

イメージイメージと考え、脳裏に過ぎるのは学校の制服。

「とりあえずこれ！」

イメージと共になのはの身体は光に包まれる。

それはほぼ一瞬のこと。

立ち上る桃色の光りが、やがて消える。

そして、そこに立っていたのは学校の制服に似た純白の衣と桃色を主体に彩られた杖を持つ、魔法使いとなったのはだった。

「ふ　服が変わってるっ!?!」

魔法使いになって初めての発言はとことん締まらない物だった。

「危ないっ!」

「ふええっ!?!」

フェレットからの声。

慌てて前を向くと、物凄い勢いで突っ込んでくる黒い塊。

爛々と光る赤い眼が彼女を捉えていた。

突然のことになのは頭を庇うように抑えて立ち尽くす。

避けることもままならない。

このままではなのはの体は軽々と吹っ飛ばされてしまっただろう。

フェレットが思わず目を逸らした時、それは起こった。

『 protection 』

なのはを庇うように出現した桃色の障壁。それは確かに塊の侵入を防ぎ、尚且つ塊を弾き返す。

身体が飛び散るが、ゆっくりだが確実に集まって再生してしまっ。

しかしここから先は完全なワンサイドゲーム。
フェレットからのアドバイスで澄まされた心に浮かぶなのは、彼
女だけの呪文。

レイジングハートが形を変え、力の発現を具現する。

再生した塊が迫る。

レイジングハートを向ける。

そして展開される桃色の障壁。

「リリカルマジカル」

呪文が紡がれ、塊の双眸の上に赤い『???』という文字が浮かび
上がった。

更になのはは続ける。

「ジュエルシードシリアル21、封印！」

『sealing』

強烈な光に照らされ、塊の姿は溶けるように消えていった。
後に残るのは青い宝石。

「これは？」

「ジュエルシードといいます。レイジングハートで触ってください」

いわれた通りにレイジングハートの先端で宝石 ジュエルシード
に触れる。

『receipt number ???』

レイジングハートから発された声と共に、ジュエルシードはレイジ

ングハートの中に入っていった。
高町なのは魔法使いとしての運命はこうして始まった。
この出会いで彼女は様々なことに巻き込まれるが……それはまだ先の物語である。

おまけ

「どこに行ってたんだ？」

「あ……お兄ちゃん」

あの後、遠くから聞こえてきたサイレンに思わず逃げ出してしまい、少し離れた場所で自己紹介などをした帰り道。

ユーノ・スクライアと名乗ったフェレットと話しながらなのは歩いていた。

そしてたどり着く高町家。

家の前には恭也と美由希が待ち構えていた。

「その……ごめんなさい！」

「春季も心配してたんだよ？」

「うっ……」

春季を出されるとなのは弱い。

双子とはいえ、姉としていい格好を見せたいと思うのは当然の心理であり、弟に心配掛けたというのは彼女にとってとても苦しい事だった。

「まあ、無事だったならいいさ。春季には美由希と一緒に買い物に行った事にしてあるからな」

暗に話を合わせなさいといわれ、なのははもう一度謝った。
それと同時に彼女の肩に乗っていた小動物、ユーノも頭を下げる。
それを見付けたのは美由希だった。

「うわぁ！ この子可愛いね」

「えっと、ユーノ君っていうの」

「へえー、よしよし」

ユーノの頭を撫でる美由希を見やり、恭也はため息をつきながらいった。

「とにかく、父さんや母さんとも話をしよう」

「はぁーい」

そんなこんなでなのはの深夜外出事件とユーノ君の高町家入りの終局はこんな顛末であった。

第3・5話 魔法少女が生まれた日？（後書き）

なのはサイドのお話でした。

こういった春季が出てこない話はこのような形で掲載していきます。
次話はおそらくそんなに時間をかけずに投稿出来るかと思います。

指摘などがありましたらどんどん教えてくださいm（）m

第4話 相談？

「おはよう……」

「おはよー高町君。……って、なんか疲れてる？」

「そう見える？」

教室での挨拶した直後の会話がこれである。

春季は苦笑しながら、今朝の出来事を話した。

前日とは打って変わって頭痛もノイズもなくいたって爽やかに目覚めた春季は、いつも通りに朝食の支度を手伝っていた。

なぜか機嫌がいい桃子、美由希に首を傾げたが特に問題なくこれを遂行。

朝食が出来たのでなのはを起こしてくるよう頼まれ、相変わらずだねと皆で笑ってから部屋へ行った。

「なのは、朝だよ」

反応無し。ノックもしたし声もかけた。残る手段は進入して声をかけるのみ。

一応、入るよと声をかけてからドアを開けた。

「なの……わあっ!？」

思わず驚きの声が漏れたのは仕方ないと思いたい。

なのはの部屋に入った瞬間、見えたのは着替え中のなのは。

そしてそれを隠すように飛び掛かってきたナニカに視界を塞がれてしまったのだから。

まさに前が見えねエ状態なのである。

「ゆ、ユーノ君?!」

どうやらこの物体はユーノというらしい。というかチクチクした感触が微妙に痛い。

「な、なのはあ、これなに?」

「にゃー! ハル君、ごめんなさい!」

その後、なのはにユーノ君とやらを取ってもらい、春季は改めてユーノ君を見た。

「これがフェレット?」

「そうなの。ユーノ君ってお名前だよ」

金色の体毛を持つイタチに似た愛くるしい小動物。先ほどのチクチクしたのはこの体毛で、桃子と美由希の機嫌が良かったのはこれを見たからか。

そのユーノ君がなぜ自分に飛び掛かってきたのかはわからないが、それよりもここにいる理由が気になった。

それをなのはに問うと、申し訳なさそうに話し出した。

「昨日ね、えつと……美由希お姉ちゃんと買い物した帰りに偶然会ったんだよ。心配かけてごめんね?」

「ああ、いいよ。なのはが誘拐されたとか怪我した訳じゃないんだしね」

冗談っぽく『お父さん達がいるこの家に入ってくる不届き者がいるかはわからないけど』と付け加えると、ようやくなのはも笑顔を見せた。

「それじゃ、ご飯が出来てるから早めにね？」
「はあ〜い」

間延びした返事を背に、春季はなのはの部屋を後にした。
話している間、下着姿でいたなのはに制服を持ってこようとしていたユーノと、首に光る昨日までしていなかったはずの赤い宝石がついたネックレスが印象的だった。

「と、こういうことがあって」

「へえ、フェレットを飼うんだね」

「うん、お姉ちゃんもお母さんも気に入っちゃって」

「動物は飼ったことがないから羨ましいなあ……つと、先生だ」

三十路独身彼氏なしで有名な女性の担任教師が入ってきた所で会話は終了する。

春季も席につこうとし、何かを思い出したような友達に肩を叩かれた。

「あ、高町君」

「なに？」

「今日の昼、ちょっといいかな？ 相談したいことがあって」

心なしか顔を赤く染めた友達は照れた様子で頬をかいた。

「うん、いいよ」

「そう、ありがとう」

明らかにホツとした様子で自分の席に行く。

はて、相談とはなんだろうと考えていると、それに集中すぎて先生に注意された春季であった。

やってきました昼食タイム。

今日は友達と食べると話すとなのはとアリサにごねられたが、すずかの消極的な協力もあってお許しを得た。

しばらくは彼女達に頭上がりそうにないと考え、いつものことじやんと思いついた時はホロリとしたのは春季だけの秘密だ。

閑話休題。

「それで、相談って？」

春季が切り出すと、やはり友達はもじもじとしたままで中々切り出さない。

ちなみに彼らは人が滅多に近寄らないであろう校舎裏にて昼食を取っていた。

まあ、薄暗いし物好きな人しか来ないよなと心の中で思うと、友達はぼつりと呟いた。

「俺さ、好きな子がいるんだ」

「好きな子？」

春季の確認するような問いに、小さく頷く。

といっても初恋がまだで三年生にはまだ早いんじゃないかと思う春季にはピンとこないのだが。

それはさておき。

まずは彼が誰を知らないことには話しにならない。

「誰が好きなの？」

ここでも時間がかかるかに思えた質問だが、意外にあっさり答えた。

「翠屋JFCのマナージャーの子いるだろ？ その子」

「ああ、あの子ね。人気あるよね」

春季も何度か話したことがある子だ。

翠屋JFCは父親の士郎がコーチ兼オーナーをしているので、春季も人数不足の時に試合に参加した時に話した程度だが。

その時はゴールキーパーをしている上級生と仲良くしていた気がする。

「なっ！ まさか高町君も……」

「へ？ いや、僕は好きな子なんていないよ」

誤解されそうな展開に、慌てて否定する。

目つきが恐ろしいことになっていた友達もなんとか納得してくれたようで、春季はそつとため息をついた。

「でもなんで僕に相談を？」

「それは高町君の人脈に聞いて欲しいことがあるんだ」

人脈というとなのはだろうか。

いや、あの双子の姉は好意というか色恋沙汰には疎そうだ。
ならばアリサかすずかだろうか。

「高町さんとバニングスさんと月村さんに最近の女子の流行とかを聞いて欲しいんだよ。俺の名前は出さないでさ」

全員でした。

「プレゼントと一緒に告白するんだっ！ だから頼む！ 高町君しか頼める奴がないんだよっ！」

「わ、わかったよ。後で聞いておくよ」

「おおっ、ありがとう！ わかったらメールで教えてよ」

そういつて手をぶんぶん振りながら、彼は上機嫌で走っていった。

「お弁当食べてないんだけどな……」

まあ、たまには一人つてのもいいかも。

そう思うことにして、春季は入学してから初の一人で取る昼食を味わった。

「ちょっと聞きたいんだけど、いいかな？」

帰り道。

昨日とは違って急ぐことなく、春季はなのは達と歩いていた。ちょうどいいので、友達からの頼まれごとをすまそつと隣を歩くなのは達に声をかけた。

「なによ、改まっちゃって」

「どうかしたの？」

「勉強のこととか？ ……って、はるき君は大丈夫だよね」

「えっと……」

いざ聞くとなると中々恥ずかしいものがある。

頬が赤くなるのを自覚しつつ、意を決して言葉を続けた。

「今、女の子に人気がある物って何かな……？」

恐る恐る三人の様子を伺ってみる。なぜか呆然とした表情で立ち尽くしていた。

「えっと、どうかした？」

そして始まる怒涛の質問。

『一体どうしたの？』

『好きな子でも出来たの？』

『ついに初恋？』

『もしかしてお昼はその子と？』

などなど。

女の子は幼くとも色恋沙汰は気になるものらしい。

若干の恐怖を感じつつ質問に曖昧な答えを返していく中、友達の名前を出さなかった自分を褒めてあげたかった。

なんとか最近の流行は海鳴市のお隣りにある遠見市のファッションショップにて売られている、『ランダムで種類ずつ販売される七種類集めると願いが叶うオレンジの球がついた携帯ストラップ』との情報を手に入れた。

なんとも胡散臭さが漂うが、人気があるなら問題ないだろう。

その旨をメールに打ち込み送信すると返事はすぐにきた。

内容はお礼とバス代を出すから今週の休日に買い物に付き合っというものだった。わずかに迷ったが、乗り掛かった船だしとOKする。

この時幸運だったのは三人娘のそれぞれが用事らしく一人でメールを打てたことだった。

特に去り際のなのは慌てようが怪しかったが、春季としても追及

をかわせるのならとそのまま見送った。

おまけ

「へえー、春季がそんな相談を受けたんだ」

「うん。なのはにはいわないでね？」

疲れた心に癒しを。

ということ、偶然家にいた美由希に話しを聞いてもらう春季。

美由希なら友達の名前も知らないし別にいいかと判断した。

「わかってるよ。でも恭ちゃんに似てるし鈍くなるかと思ったけど、春季は大丈夫そうだね」

「そんなに似てるかな？」

「うん、そりゃもう」

身内からも近所さんからもよくいわれるのだ。

恭也にそっくりだと。

別に嫌ではないし、むしろ格好いい兄に似てるといわれると嬉しく思う。

ただ少し気恥ずかしくもあるが。

「だけど春季となのはは大変だね」

「えっ、なんで？」

「なのはに恋人が出来たら恭ちゃんと父さん、春季に出来たらなのはが大騒ぎしそうだよ」

そういわれると自分のことはともかく、なのはの恋人は苦労しそう

顔を見合わせ、お互いに笑い合う。
姉と弟の午後の語りだった。

第5話 運命？

少女は魔法と出会った。

そして、今日。

少年は運命と出会う。

二人の出会いは いや、物語はいつだって青い石の導きから始まる。

今日は休日。

約束通り買い物に付き合う春季はバスに揺られていた。

揺られながら、隣ではしゃぐ友達を見て思わず眉間を抑える。

彼は明日行われるサッカーの試合の応援に行つてマネージャーの女の子に告白するらしい。

そのせいでテンションが上がっているのか、行動は活発だ。少し落ち着いてほしい。

周りの人の迷惑にもなる。

「もう少し静かにしないとダメだよ」

「大丈夫、俺は出来る男だから！」

何がなんだか。

何度目かの注意もどこ吹く風、友達は変わらずはしゃぐ。

遠見市はそんなに遠くない。

道が混んでたとしても大体一時間くらいだろうか。

一時間の我慢だと言い聞かせ、春季は流れる風景を眺めながらなのは達は楽しくやっていいるかなと呟いた。

今日のなのははアリサやすずかとプールへ行くようだ。春季も誘われたのだが、先約としてこの付き合いがあったので断ったのだ。本日は晴天なり。絶好のプール日和だった。

「こ、ここか」

「入りたくないなあ……」

遠見市に到着したのは揺られて一時間十分ほど後だった。

わずかに遅れながらもバス停から歩きつづけ、やっとたどり着いた。割と距離があつたので意外に歩くことになったが、目的地についた途端疲れなど吹き飛んだ。

なのはから貰った地図の位置まで来て目に入るのは女性の人ばかり。内装はピンクや白といった色で統一されており、一際目を引くのは大小様々なぬいぐるみ。

さすがにファンシーショップに男同士の客はいないようで、たまに見掛ける男性は恋人と一緒だ。

男同士では入るのに躊躇われるのは仕方ない場所であった。

「僕、外で待つていい？」

「ダメだよ！ よし……行くぞ、行ってやる！」

春季の提案は一蹴。

友達に手を引かれながら魔窟へと足を踏み入れた。

いやもう入ると密集率の高いの何の。

もう少し年が上ならば痴漢で突き出されたかもしれないほどの密着だった。

幸いにも小学生だった春季達は微笑ましく見られたただだったが、慣れない感触に頬を染める。

「あつた！」

「ああそう……早く買ってきて」

「うん！」

笑顔で七ツ集めると願いが（略）を手に取りレジへ向かう友達。

こんな状況でなければそれを見て良かったと思えるが、今は頼むから早くとしか思えない。

手持ち無沙汰になり人が少ない所を求めて店内をさ迷う。

犬のぬいぐるみを見つめてはこれはバニングスさん、ねこのぬいぐるみなら月村さんかな？ と友達が持つと似合いそうな物を現実逃避気味に連想する。

なのはは……

「なのははなんだろう？ ……なのはもねこかな」

たまにねこ化するし。

焦ったり驚いたりするとにゃーというなのはを思い出してくすくす笑う。

「あの、高町君」

気付けば心なしか疲れている友達が側に立っていた。

「あ、終わった？」

「うん。早く出よう」

「そうだね」

手に持つ小さな紙袋はさっきのストラップだろう。
一部を除いたら楽しめた気がするファンシーショップを出る。
今度のは達と来るのもいいかもしれない。

来た道を戻る春季達。

用事は終了したので後は帰るだけだ。春季も特に用はないので、本
当に買い物に付き合ったただけだった。

「あつ。そうだ、高町君にお礼にこれあげるよ」
「え？」

友達がポケットから出したのは青い石。

「綺麗だろ？」

「う、うん」

「この前拾ったんだ。拾い物で悪いけどさ、よかったら貰ってほし
いな」

「あ、ありがとう」

断るのも悪い気がして青い石を受け取り、ポケットにしまう。

「それじゃ、俺は作戦会議がしたいから行くよ」

「ああ、そう」

なんか最近振り回されてばかりだ。少し交遊関係について考えた
方がいいかもしれない。

走っていく友達を見送り、春季はゆっくりと歩く。
そしてポケットから取り出した青い石を眺める。

「うん……」

綺麗だけど、どうしよう。

「なのはにでもあげようかな」

女の子とカラスは綺麗で光る物が好きらしいし。

そんな春季の心の中を覗いたのかカラスが『かあ』と鳴いた。

さすがにカラスと女の子を同列に扱うのはどうかと思われるが、春季は気にせず歩く。

「あの、ちょっといいですか？」

声をかけられ振り返る。焦った。

女の子だ。そして外人さんだ。

女の子で、更に外人さんなのである。

長く綺麗な金色の髪は頭の上で二つに分けて結われており、風が吹く度に金糸が揺れているようにも見える。

極上のルビーをはめ込んだような深紅の瞳。

どこからどう見ても外人さん要素100%である。

だから春季は焦っていた。

そう、日本語で話し掛けられたという記憶すらぶっ飛ばして。

「あ、あー……あいあむ、はるき」

「え？ あの」

「あれ、間違えた？ まいねーむいずはるき？」

「えと、はるき？ まいねーむいずふえいと」

「おおー！」

伝わった！

拙い英語だが、人類皆兄弟。心を込めれば言葉なんてコミュニケーションのほんの一部に過ぎないとその身を以って知った。結局、この教訓はきちんと英語を学ぶ中学校で打ち砕かれるのだが。

それはともかく。

「はるき。フェイト」

「フェイト。はるき」

なんとということでしょう。

そこには一つの不思議空間が完成していたのです。交互に指を指し、名前を確認しあう二人がいた。

高町春季の短い人生において初めて女の子を呼び捨てにした瞬間であつたことも追記する。

もちろん家族以外で。

「えーと、ごめんなさい」

「あ、私もごめんなさい」

二人でぺこりと頭を下げあう。

あの後も訳のわからない英語だか日本語だかで話しつつづける春季と女の子 フェイトというらしい だったが、フェイトの日本語で話せるよとのお言葉で終了と相成った。

「それで、何か用かな？」

「あ、そうだった。その、あなたが持つてる石が……」

「これ欲しいの？」

女の子が指したのは春季が貰った青い石。

やはり女の子はこうというのが好きなんだなあと思いつつ一応、確

認すると女の子は速攻で首肯する。

別に春季としてもなのはに押し付け……ゲフンゲフン。
プレゼントしようとしていたのだが、やはり持っていたと思う人が持つべきだ。

「それは危険な物かもしれないの。だから私に渡してほしいんだ」

春季の沈黙をどうとつたのか、フェイトは強い眼差しで訴える。

そしてフェイトの言葉をじっくり吟味。

危険な物を欲しがると危険な人。こんな式が頭に浮かぶ。

でもフェイトは危険な人には見えない。

ということは危険を省みず危険な物を集める「正義の味方……？」

もしかしてこの子はウルトラ仮面レンジャーの一員かもしれない。

そして人知れずこの石を探しているのだ。

……それは冗談にしても、なぜ危険な物だという石を欲しがっているのか？というのは気になった。

「うん、いいよ」

「ほんとう？」

春季の返答にホッとしたりのように緊張をとく。

「でも、なんでこの石を集めてるのか聞いていいかな？」

「それは……」

聞かれたくないことなのか、フェイトは口ごもったまま俯く。

「……はい、どうぞ」

「えっ？ あの、これ」

俯いていた彼女の右手を取り、石を握らせる。
戸惑うフェイトに笑いかけ、春季は続けた。

「危険な物だつてわかつてるこれをどうして君が集めるのか気になつただけで、君を困らせるつもりはなかったんだ」

最後にごめんねと付け加え締めくくる。

「あ、ありがとう、はるき」

「どういたしまして。それじゃ、僕はこれで」

帰路につこうと踵をかえし歩き出す。

今日の夕飯はなんだろう、宿題やらないとなど、割とどうでもいい思考を繰り返しファンシーシヨップから大分離れたバス停のベンチに座る。

座り……やっと気が付いた。

後ろに何かいたそうにしているフェイトがいたことに。

「どうしたの？」

もしかして石が不良品だったのだろうか。

「あの、私、その……」

何をいうか迷っているのだろう、フェイトは混乱した様子を見せる。

「ゆっくりでいいよ、まずは深呼吸してみようね」

恭也にしてもらったように頭を撫でて深呼吸を促す。

「う、うん。すうー……はぁー……すうー……はぁー」

何度かのそれをするとう落ち着いたようだ。やはり兄は偉大だと心の中で尊敬の念を大きくする。

「それで、どうしたの？」

落ち着いた所で本題を切り出す。

今度はしっかりした表情で、フェイトはいった。

「私がこの石 ジュエルシードを集める理由は母さんに頼まれたから」

「……」

はてなである。

この石がジュエルシードという名称だったとか、理由とかはひとまず置いておく。

「それをいうために、わざわざ僕の後を？」

こくりと頷く。そして春季は思う。きっとフェイトは優しい子なんだ。

ただ貰うだけじゃ悪いとも思ったのだろう、そのためにわざわざ春季を追い掛けてきてまで話してくれたのだから。

その理由も母親に頼まれたからというではないか。

(きっとフェイトのお母さんも何か理由があるんだ)

もう少し春季が成長しており、世間を知っていたならば。危険だとわかっている物を幼いフェイトに集めさせる親に疑問を持つただろう。

今の彼は幼く、母親のために頑張るフェイトに感動するばかりだった。

「ありがとう、話してくれて」

「ううん、私もジュエルシードを貰ったから」

そして彼は決意する。

「これ友達から貰ったんだ、拾ったらしい。だから、また落ちてたらフェイトにあげるよ」

「あつ」

春季の言葉に嬉しそうに顔を綻ばせるフェイトだったが、一転して真剣な表情になる。

「ダメだよ。危ないから」

「でも」

「私は、はるきに怪我してほしくない」

きっぱり断言されてしまった。

しかしここで引き下がる訳にはいかない。

「なら偶然見付けるよ」

「偶然？」

「そ。散歩してる時とかにね」

悪戯っ子のような笑みを見せる春季にきよとんとするフェイト。

やがてくすりと笑う。

「それじゃあ危ないことには変わらないよ?」

「そうだね。だから見付けたらすぐにフェイトに知らせないと」

そういつて小さく笑い合う。

そして、折れたのはフェイトだった。

「自分から近付いちやダメだよ? 危ないからね」

「わかった」

「見付けたらすぐに教えてね?」

「わかってるよ」

「それから」

「ああ、バスが来た! 乗らないと!」

まだなにかいいいたげなフェイトの言葉を遮り、やって来たバスに急いで乗り込む。

窓際の席に座って窓を開けた。

「それじゃ、またねフェイト」

「う、うん。……また、ね」

小さく手を振るフェイトに手を振り返す。

そしてバスは動き出す。

ゆっくり動き出したバスは徐々にスピードを上げていく。
窓の外にはもうフェイトは見えない。

振り回された休日だったけど、いいことはあった。

「フェイト、か」

今日出会った女の子。
帰ったらなのはにも話してみようと思いつながら、彼を乗せたバスは海鳴へと帰っていった。

おまけ

「あつ！」

バスに揺られながら春季は不意に思い出す。

なぜ今頃になって思い出すのか……自分のことながら間抜けとしかいいようがない。

あなたは抜けた所もあるから注意しなさいとはアリサの言葉だ。

……家族全員からもいわれた気がする。

いや、それはどうでもいい。

今は問題解決をしなれば。

十秒後

……結論、どうにも出来ない。
なぜなら

「連絡先聞くの忘れてた……」

見付けたら教える？ははっ、どうやって。

自己嫌悪に陥る春季が復活したのは降りなければいけないバス停を過ぎた後だったそう。

結局新しい出会いを誰にも話せず、どんより落ち込んだ春季を慰めるようと奮闘する兄弟達の姿が見られたとか。

第5話 運命？（後書き）

なんとか完成した第5話を投稿しました。

プロットを見ていてユーノ君が空気すぎなのに今さら気が付いた曇天です。

春季が魔導師とか魔法の存在を知らないのも彼が話せないというのが理由ですが……うーむ、なんとか彼に見せ場を作ってあげたいものです。

次の第6話は早速難産しているので、3日ほどかかるかもしれません。

その前に少量の5・5話を投稿する予定ですが、これまたユーノ君に出番は無し……

嫌いという訳ではないのでユーノファンの皆様には申し訳ありませんが、彼の活躍はしばらくお待ちくださいm(_____)m

第5・5話 回想と慰め？

面白い子だったな……。

フェイトは先ほどまで一緒だった少年、春季を思い返していた。言葉が通じないと思いついて拙すぎる英語で懸命に話すはるきに調子を狂わされ、お互いに名前を言い合った事を思い出して赤面する。

「フェイトー、下見はすんだかい？」

そんな彼女に遠くから声を掛ける一人の美女。

日本人離れたオレンジ色の長髪にグラマーな体を揺らしながら美女は駆け寄ってきた。

「あ、アルフ」

「んんー？ なんだか顔が赤いけど大丈夫かい？」

「だっ大丈夫だよ、それよりこれ」

赤い顔を隠すようにフェイトは美女 アルフにずっと握りしめていた青い石を見せた。

「これって……これがジュエルシード？ なんか聞いてた話とは違って魔力を感じやすいねえ」

「えっ……？」

そういわれて改めて石の魔力を感じる。

ロストロギア 過去に滅んだ超高度文明から流出する、発達した技術や魔法の遺物。

封印された形跡もないロストロギアがこんなに微弱な魔力を放つだ

るうか。
いや。ジュエルシードの場合、発動前は魔力の感知がまったくといいほど出来ない。
この石はむしろ、知覚できる魔力を放っているところを探し物ではない決定的な証拠だった。

「勘違い……しちゃった」

微弱な魔力を感じたので思わず声をかけて、貰ってしまったが……失敗だっただろうか。

「まだ始まったばかりだよ！ 気にしないで今日はご飯にしよう！」
「……うん、そうだね」

ミスを引き摺る訳にはいかない。
フェイトは母のためにジュエルシードを集めなくてはならないのだから。

だが。

フェイトは失敗と感じていたが、それは少しだけ間違いだ。

あの時のフェイトは間違いなく、笑っていたのだから。

その事に気付かず、フェイトとアルフは遠見市の喧騒に紛れていた。

その頃の高町家

「ふふふ……僕って本当にバカだなあ。だからいつもバニングスさんにも恭也兄さんにもすっかりしろっていわれるんだ」

家に帰るなりただいまも言わず自室に引き込もってしまった春季君。仕事が取れない営業マンのように煤けた彼の背中を高町家の長男、長女、次女がこっそりと見詰めていた。

良い子と褒められる事が多い高町家の子供達だ。その中の春季が挨拶もしないのだから、家族が戸惑い混乱するのも無理もない。

まだ翠屋で働いている桃子と士郎がいたら家族会議でも開きそうなほどに。

「はる君大丈夫かな……？」

「うーん、何かあったのかな？」

「何かあったから春季はあんな事になっているのだろう」

「キュッ」

なのはの心配に美由希の疑問とその疑問に対する模範回答を述べる恭也、そしてなのはの肩の上で愛らしく鳴くユーノ。

「仕方ない、俺が直接聞いてこよう」

そういつて立ち上がるのは恭也だ。

普段はなのはばかり可愛がっているように見えるが、彼は比較のしようがないほどに兄弟を、家族を愛しているのだ。

春季に対してたまに厳しい事もいうが、それも春季に男として強くたくましく育ってほしい一心からだ。

だから弟が落ち込んでいる時は話を聞き、少しでも力になろうとするのは恭也にとって当然の事だった。

「美由希となのはは下で待っていてくれ」

「私も聞くの！」

「しーっ。春季に聞こえちゃうよ？」

大声で恭也に反論するなのは美由希が諫め、改めて部屋を覗く。相変わらず春季はずーんと重い空気をまといながらドアに背を向け体育座りをしていた。

「ふう……ここは恭ちゃんに任せよ？ 男の子同士なら話してもしやすんじゃないかな」

「……わかったの」

なのはが納得し、二人と一匹が階段から降りていくのを見送り、恭也は気合いを入れ直す。

慰めるなんて器用な真似は自分には出来ない。

不器用は不器用なりに弟の話聞き、少しでも負担を軽くするだけだ。

そう決心し、恭也は春季の部屋を開いたのだった。

そして。

なんとか春季の悩みを聞いている内に呆れ、つい『本当に少し抜けているな』と本音をポロリしてしまつて更に春季を落ち込ませてしまったのは恭也の次回への教訓となつた。

その事で美由希となのはからは怒られてしまい、兄の威厳も少しだけ抜けてしまつたのは……自業自得かもしれない。

第5・5話 回想と慰め？（後書き）

短すぎな5・5話を投稿しました。

6話は3日ほどかかると前回の後書きに書きましたが、意外と早く完成したので推敲してから夕方にもあげたいと思います。

第6話 チート？違う違う

少年は向き合っていた。

己の鍛えた技と武器をその手に携え。

子供とはいえこれは真剣勝負。敗北は許されない。

そして少年 春季はひたすら戦い（フルーツカッティング）に挑むのだった。

桃にメロンに苺 e t c ……。

色とりどりのフルーツは足りなくなった物の補充と、春季が手掛ける翠屋の隠されたメニュー『デコレーションフルーツ』のためだ。

プロに勝るとも劣らないフルーツカッティングはなのはを筆頭にアリサやすずかなど、高町家と親しい人達に可愛いし綺麗と大人気のメニューだ。

見る者が口を揃えて『本当に子供が作ったものか？』と尋ね、それにもちろんですよと返す桃子の表情は一際嬉しそうな笑顔だった。

まあメニューとはいっても所詮なんの免許も持たない小学生が作った物なのであればサービス用だが。

そんな大人顔負けな彼の包丁捌きは剣術を嗜む父親達の才能を受け継いだのかか、パティシエの母親から教わった彼の努力の結果か。あるいは両方が揃って初めて発揮した彼の才能かもしれない。

士郎はといえば、自身がコーチ兼オーナーをしているサツカークラブ、翠屋JFCの試合日で店を空けている。

そこにたまたま人手の不足が重なり、春季はフルーツカットの手伝いをしているのだ。

他の厨房業務はさすがにやらせてもらえないが、春季は春季なりに充実している。

とりあえずの分が切り終わり、春季は包丁を置いてフルーツを入れたトレイを忙しそうに作業をする桃子の近くへ持って行った。

「はい、お母さん」

「あら。ありがとう、春季」

ほんわかした笑顔でトレイを受け取った桃子から休憩に入る様に促され、春季は邪魔にならないように空いていた店のカウンターに腰掛けた。

手が空いた事で思い出すのは双子の姉、なのはと交わした今朝の会話だった。

「本当に行かないの？」

残念そうな表情で質問をするのはに、春季は苦笑しながら頷く。小さいサイズの翠屋のエプロンを肩にかけた鞆に入れ、改めてなのはに向き直る。

「翠屋のお手伝いも楽しいからね。気にせず行っておいでよ」

「むうー……アリサちゃんとすずかちゃん、怒るだろうなあ」

「うっ……」

アリサの烈火の如き動の怒りと、すずかの極寒の大地に吹雪きの如き静の怒とを想像し、こめかみにたたりと冷や汗が流れた。

「ユーノ君もはる君と一緒にいきたいよねー？」

「キユーー」

ユーノにまで同意を求めてる姿に自分がどんどん追い詰められるのがわかる。

困った。

どうしよう。

このままの流れだとなし崩しでサッカーの応援に行く事になってしまっ。

普段なら一緒についていく所なのだが今日は人手不足の翠屋を手伝うと母にも姉にも言ってしまうている。

この会話を聞かれたらおそらく、というか確実に店はいいからなのについていつてらっしやいというのだろうが、春季も男の子だ。一番いったことは守らなければならぬと心に決めているのだ。

そして散々悩み、考え抜いた末に。

春季少年に出来たのは極めて戦略的かつ愚かな行動、即ち

「僕、先に翠屋に行ってるね！」

「ああっ！ 逃げちゃダメだよー！」

追及者からの逃亡であった。

『逃げたいときもあるだろうが、そんなときは弱い自分と戦わなければならぬぞ』とは尊敬する兄の言葉だっただろうか。

あの場から逃げ出し自己嫌悪、更に明日の学校での三人娘からどんな言葉をいただくのか……考えるだけで恐ろしい。

「はあ……」

また一つ幸せが逃げ出した。

そういえば告白を決心した友達の決行日が今日だったなあと思います。

色恋沙汰に疎い春季だったが、告白相手の翠屋JFCのマナージャーは同サツカークラブのゴールキーパーを努める上級生と極めて仲がよかったのはよく知っていた。

友人として応援したい反面、もう半ばまで想像できる結果にもう一度幸せを逃がす。

「よしっ！」

溜まりに溜まった憂鬱を吐き出し、頬を両手でパンツと張った。

まだ仕事は残っている。

考えるのは後回しにしよう。

桃子が春季を呼んでいる。

今は戦い（フルーツカット）に没頭するのだ。

「フルーツが切り終わったら春季もお菓子作ってみる？」

「ええっ！」

そんなことを桃子に問われたのはケーキに添える飾り切りしたメロンをトレイに置いた時だった。

螺旋を描くようにカットされたそれは他の職人と比べても遜色ない出来映えであり、春季の技術の高さが伺える一品。

「本当にいいの？」

「お客さんも少なくなってきたからね。それにそろそろサツカークラブの子供達が戻ってくるわ。食べて貰いましょうか」

桃子の言葉に首をぶんぶん縦に振って頷く。

実は春季少年。

包丁の扱いは飾り切りに桂剥きになんでもござれといった具合に得意だが、それを生かすためのお菓子作りはまだまだ未熟だ。

家族に食べて貰った事はあれ、他人に食べて貰った経験は皆無といえる。

そんな訳で、桃子の提案は大人しい春季がはしゃぐほど嬉しい事だった。

作るお菓子をうんうん唸りながら悩む春季を微笑ましく従業員達は見守っていた。

「さあ皆、どんどん食べてくれ」

サッカークラブの少年達が翠屋に集合している。

試合の勝利を祝って土郎がごちそうすると連れてきたのだ。

子供達も美味しいお菓子を食べられると無邪気にはしゃいでいる。

そして店内とは変わり、外に設置されたテーブルを陣取るなのは達だ。

なのは達が来たことで店の手伝いはいいからいつてらっしゃいといわれ、春季も挨拶と謝罪をして席についたのだが……

なんかなのはがヤバイ。

春季はそつとなのはの様子を伺った。

「……」

眠そう、というか半分寝ながらお菓子をパクつくなのは。

意外や意外、三人は謝るとすぐに仕方ないねと許してくれた。ちなみには春季が作ったチョコレートのお菓子『ブラウニー』は中々の評価をいただいた。

そんな彼女達はユーノと遊んでいたのだが、遂になのはの首はこっくりこっくりと舟を漕ぎ出した。

「なのは、大丈夫？」
「ふえ……？」

声を掛けるとこれまた眠そうな声。
見かねたすずかもなのはを心配そうに見やる。

「なのはちゃん、大丈夫？ 疲れてるなら家で寝た方がいいんじゃないかな？」
「そうそう、明日は学校だし無理しない方がいいわよ」

「うーん、ごめんね。そうしようかな」

そういつて立ち上がり、ユーノを両手で持ち上げるなのは。
彼女の肩がすっかり定位置となっているユーノが器用に肩に登った。

「一人で大丈夫？ 僕も一緒に」
「ううん、大丈夫だよ。ありがと、はる君」

春季の申し出を断り、ニコリと笑ってなのはは翠屋を後にする。
その直後、士郎が店内から出てきて首を傾げた。

「おや、春季。なのははどうしたんだ？」
「疲れてるからって先に帰ったよ」

「そうか。一緒に帰ろうと思ったんだが……仕方ないか。アリサち

やん、すずかちゃん、ゆっくりしていつてね

「はい！」

「ありがとうございます」

元気な返事に士郎は微笑む。

「それと春季、今日はありがとう」

「う、うん。僕も楽しかったから」

「それじゃ、また後でな」

頭を撫でられ恥ずかしさを覚えつつ、春季は手を振って士郎を見送った。

「ところでハル」

「ん？ 何？」

カフェオレを飲んでいたアリサに話し掛けられ、返事と共に振り向く。

「さっきのサッカーの試合中なんだけど、ハルの友達が来てたわよ」

「そういえば包み紙を持って試合を見てたね。終わった後、マネージャーの女の子と話してたみたいだけど……」

友達と包み紙にマネージャーといわれピンと来る。

彼は勇気を振り絞って決戦に挑んだらしい。

「そっか」

（頑張ったんだなあ）

色恋はわからなくても、気持ち传达了彼の勇氣は胸に響く。
結果はどうあったとしても、友達の格好よさを讃えよう。

「んー、あれって……絶対告白よね」

「こ、告白っ」

アリサはニヤニヤ笑い、すずかの頬はかすかに朱がまじる。
鋭い。さすが女の子。

「ハ、ハルは」

「うん」

不意にニヤニヤ笑いをやめたアリサの頬が赤く染まる。

ちらちら自分を見る視線を受け止めながら、ミルクたっぷりのカフェオレを口に含み

「すっ、好きな子とかいないわけ？」

すきなこ好きなこ好きな子……

「ぶふううーっ！」

「きゃあああああ！ はるき君大丈夫!？」

「なっ、なにやってんのよーっ！」

それを空中にぶち撒けた。

日光を受けてキラキラ光るカフェオレは、それはそれは美しい放物線を描いて運よく床に吸い込まれ、その場を濡らしただけに留まった。

「けほっけほっ……ごめんね、汚いの見せちゃって」

「うん、はるき君は気にしないで」

謝る春季を慰め、すずかはアリサを見た。
普段大人しいすずかにしては珍しく睨むように。

「もうアリサちゃん。いきなりあんなこといわれたらびっくりしちゃうよ?」

「うっ……悪かったわよ」

「いいよ、気にしないで。びっくりしただけだから」

騒ぎを聞いて外に出てきた美由希からタオルを受け取り、口元を拭きつつアリサの謝罪を受け入れる。
拭き終わった際にお礼をいうのも忘れない。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「うん、溢さないように気を付けてねー?」

笑顔でそのまま床の拭き掃除をしはじめる。

そんな美由希を見た三人も手伝うといったが、やんわり『大丈夫だよ』と断られてしまった。

なんだか無性に疲れてしまった。

テーブルに置いてあるピッチャーから水を注ぎ、それを飲み干す。

「ふう……」

落ち着いたら落ち着いたで先ほどのアリサの質問の意図が気になる。

「どうしてあんな質問をしたの?」

「そっ、それはっ! 私達と仲がいい男の子っていったらハルしかないし同年代の恋愛に対する……そうっリサーチよりサーチ!

わかったっ!？」

一息で捲し立てられる。

顔を真っ赤にしながら一気に話されるとちよつと怖い。

壊れた人形のようにガクガク首を縦振り、なんとかアリサの激情は収まったようだ。

「怖かった……」

「ああ、はるき君泣かないで!」

被害者は全く立ち直っていないが。

「まったくもう……最近の男つてのはフラれたり、ハルみたいにちよつと怖い思いをしただけで泣くんだから」

『フラれたり』？

その言葉は震える春季を正気に戻した。

「フラれたって、告白を見てたの?」

「え、ええ。皆で翠屋に行こうとしたらいきなり大声で告白しだしだから」

大声って……

最早内緒にしていた意味がない友達の行動に頭を抱える。

そんな、さつきから感情が不安定な春季を見るアリサとすずかの眼差しは少し引いていた。

「まあ、さすがに最後まで聞くのは気が引けたから先に翠屋に向かったんだけど。その結果は私達を抜いて泣きながら走っていった男

の子と……さっきのあれよね」

「可哀想だけどね……」

「さっきのって？」

アリサ達の間では伝わる『あれ』の正体を聞く。
疑問に答えたのはすずかだった。

「はるき君がここに来る前にね、その女の子が帰っちゃたの。サッカークラブの男の子と一緒に」
「な、なるほど」

それだけ聞けば十分だ。

やはり友達が好きになった子はゴールキーパーの男の子が好きだった。
見事なとらいあんぐるである。

フラれたのなら慰めに行こう。

余計な慰めな更に惨めになることもあるのだが、人生の経験値が低すぎる春季がそれを理解するのは難しいだろう。
とにかく動こうと確認をとる。

「僕の友達なんだけど、どっちに走っていったかわかる？」

「うーん……あそこだから川沿いに走ったんじゃないかしら」

サッカーグラウンドの近くにある川沿い。

とりあえずの目的地は決まった。

「ありがとうー！」

その後の春季の行動は速かった。
美由希に出掛ける旨を伝え、アリサとすずかにまた明日ねと告げると真っ直ぐ走り出した。

おまけ

走り去った春季をポカンと眺め、やがてアリサ達は溜め息をついた。

「はるき君も相変わらずだね」

困ったようにすずかは笑った。

「まったく、なのはといいハルといい突っ走ったら止まんないんだから」

ちよつと不機嫌そうにしてアリサは口を尖らせる。

近頃の二人が何かを隠しているのはアリサとすずかからしたらバレバレであった。

といつてもなのはと春季は違う秘密を隠しているのだが、神ならぬ二人にはわからないことだったが。

「ふーむ、アリサちゃんも大変そうだねえ」

「えっ！ 美由希さんっ!？」

片付け終えたらしい美由希が苦笑しながらアリサを見つめた。

「春季は大丈夫だと思ったんだけど……しっかり恭ちゃんの鈍さも持ってるみたいだね」

「あつ、あの！ 私はハルのことなんとも思っていないですからっ！」
「照れちゃって可愛いなあ」

取り合う様子もない美由希に必死で否定するアリサ。
すずかからしたらアリサが必死になるから美由希も照れ隠しだと思
うのに……と思うが、いつても聞かないだろう。

「大丈夫！ 私はアリサちゃんのみ方だからね！ 鈍感な春季の気
を引く方法なら教えてあげる！」

「えっ！ ……別になんとも思っていないけど、ハルのことは友達と
して知ってなきゃならないと思うので、一応聞きます！」
「むふふー、春季はねえ」

アリサが墜ちた。

件の少年はこれから苦労するだろうなあと思いつつも、親友の恋を
応援したいとも思うすずかはとりあえずなのはにも報告するために
美由希とアリサの会話を聞くのだった。

アリサとすずかが自分達にも用事があったことを思い出すのは辺り
がすっかりオレンジ色に染まった時だったとさ。

第6話 チート？違う違う（後書き）

宣言通りに第6話の投稿をしました。
間に合ってよかった……

この後は少しずつですがオリジナルイベントを挟みつつストーリーを進める予定です。

おそらく次の話はなのは視点になると思います。

おまけを入れ忘れたので修正しました。

第7話 失敗と決意？

士郎が監督を勤める翠屋JFCの試合を観戦しながらも、なのはの身体は疲労していた。

ジュエルシードが発動する度に夜の学校に侵入したり、遊びにいったはずのプールで戦ったりと、つい先日まで普通の小学生だったなのはにとってはハードな日々だ。

もちろんそれを気取られないようにしていたが、家族や親友にはバレレらしかった。

春季にはまた心配をかけ、なんとも心苦しかったことは記憶に新しい。

春季といえば、ユーノから魔法について教えてもらっているときにいつていたことを思い出す。

『なのはの弟、春季っていったっけ』

『そうだけど、はる君がどうかしたの？』

『彼にも魔力があるみたいなんだ』

『はる君に！？』

『双子だけあってなのはにとてもよく似ているんだけど、君に比べると……うっん。比べようがないくらいわずかに、だけどね』

『そういえば……ユーノ君から初めて会った日、はる君珍しくお寝坊してたよ』

『なるほど……春季にも僕の念話が届いていたのかな。それでなのは、このことは春季にはいわないでおこうと思っただ』

『どっしってっ』

『君や僕と違って彼の魔力はとても低い。ジュエルシードが発動し

た時、彼も危険になる。これ以上関係ない人を僕のせいで巻き込みたくないんだ」

『うん、そうだね。はる君が怪我するのは嫌だし……わかったよ、ユーノ君』

『ありがとう。……それに』

ユーノの言葉はあまりに小さすぎて聞こえなかった。聞き直したが、彼はなんでもないと首を振ったからだ。

(なんていつてたんだろう)

なのはが思考に没頭している間に試合も動いていた。

ラスト十秒の相手チームのシュートを翠屋JFCのゴールキーパーが止めた。

それを見てはしゃぐアリサとすずかをぼんやり見ながら、なのはは別のことを考えていた。

「大好きです！ 俺とお付き合いしてください！」

告白だった。

もちろんなのは達にはない。

彼の顔は見たことはあってもそれだけなのだから。

彼が告白していたのは彼女達の先を歩く翠屋JFCの選手達と一緒にいたマネージャーの女の子だ。

「告白なんて初めてみたわ」

「わ、私も……」

「なのはちゃん、アリサちゃん。ずっと見とくのは悪いよ」

「そうね、行きましょ」

すずかのやんわりした声に頷き、見なかったことにして談笑しながら歩き出す。

少女達の頬が真っ赤になっていたのは仕方のないことだろう。

「うわあぁー……んっ！」

そんななのは達を泣きながら追い抜いていった少年をポカンとした表情で見送り、なんとなく結果を察する。

「い、行こっか」

「そうね……」

「う、うん」

今度は無言で歩き出す。

願わくば、あの少年に幸あらんことを。

「ほらユーノおー？」

「キユツ！」

アリスの掛け声でユーノが体を張った芸を苦笑しつつ眺めてから、なのはは翠屋の中を見た。

彼女の視線の先にはエプロン姿の春季がテーブルにかける子供達にお菓子を配膳していた。

（はる君に……魔力かあ）

なのはがしていることを、春季が知ったらなんていうだろうか。

そんなことを考え　すぐに、というか考えるまでもなかった。
春季ならなのはだけを危険に遇わせる訳にはいかないと、自分も手
伝うといいだすだろうから。

思えば士郎が大怪我をして入院し、家の中に暗い雰囲気漂っていた時期があつた。

幼かつたなのはも忙しそうに働く桃子達の手伝いをしようとかかすることはないかと聞き回つた。

だが家族達はその申し出をやんわりと、しかし確実に拒絶したのだ。大丈夫だから遊んでなさい、と。

寂しかった。

孤独だつた。

温もりが欲しかった。

そんな時だつた。

手の掛からない大人しく性格の春季が初めてなのはに対してワガママをいったのは。

ホットケーキが食べたい。一緒に作つてよ。

駄々っ子のようにせがむ春季に当時は煩わしくも感じた。

結局、二人で買い物に行きホットケーキを作つたのだが、見た目は最悪の一言に尽きた。

中は生焼け外はこげこげ。

とても食べられないそんなホットケーキを春季は笑顔で食べてくれた。

なのはも一緒に食べ、食べていく内に涙が溢れた。

泣き出したなのはを見た春季も一緒に泣いた。

誰かに頼られたかつたのだ。

頼られるということは必要だと思ってくれていることだ。
春季はなのはを必要だと思っている。

そんな事実がどうしようもなく嬉しくて、少しだけ申し訳なかった。
寂しいのは春季も一緒だったはずなのに、なのはは春季を構わなかった。

なのはは、はる君のお姉さんののに。

なのはが春季を過保護ともいえるくらい気に掛け始めたのはこの日があったからだ。

今にして思う。春季のワガママは幼い彼なりの優しさだったのでないか。

だから、なおさら春季にはいえない。
高町なのはを必要としてくれる優しい弟は、必ずなのはを助けようとしてくれるから。

危険な目に遇わせる訳にはいかない。なのははお姉さんで、春季は守るべき大切な弟なのだから。

「なのはちゃん？」

「にゃっ!?! にゃ、にゃに? すずかちゃん」

上の空だったなのはを氣遣ったすずかの声に驚き、なのははねこ化した返事をしてしまう。

「なーにぼんやりしてんのよ?」

「う、ごめんね。何でもないよ」

そういつて温くなったカフェオレで喉を潤す。

『なのは、大丈夫？』

『うん！ 大丈夫だよ』

ユ一ノにも心配をかけたらしい。

念話で返事を返していると、不意にカラベルが鳴った。

外にはなのは達しかいない。

店から出てきたのは先ほど告白を受けていた女の子とゴールキーパーをしていた男の子だった。

二人は傍目から見てもいい雰囲気です。翠屋を背に歩き出す。

「あの女の子、もしかして」

「うん。あの男の子のことが好き、なのかな」

「相思相愛って憧れちゃうなあ」

彼らを眺めながら各々の感想をいい合う。

やっぱり女の子だ。

こういう話は大好きなのだ。

「あれ……？」

ほんの一瞬。

男の子が手に持っていた物。あれはジュエルシードではなかっただろっか？

だがほんの一瞬だったので。

気のせいかな？

疲れも手伝って、彼女の思考はそこで停止してしまった。

「お、お待たせ」

再び鳴ったカラベルと同時に声がすった。
見るまでもなく、声だけで誰だかわかる。

笑顔を必死で押し殺し、少し怒った風に彼の名前を呼んだ。

「遅いよ、はる君？」

「ごめん、それと今朝はごめんね」

開口一番の謝罪。

それにアリサとすずかが答えた。

「仕方ないわよ、お店の手伝いをしてたんだから」

「うん、気にしないで、はるき君」

二人が許してしまっただけなのはも許すしかない。

元々あまり怒っていなかったのだから、許すも許さないもないのだが。

これもジュエルシードの探索で一緒にいられない時間を埋めるためのスキンシップなのだから。

「謝ってくれたし、許してあげるの」

でも素直にそれを伝えない。

苦笑する春季を見つめながら、なのははやっと笑顔を見せた。

「それで、これ……」

椅子に座った春季が見せたのはお皿にのったチョコレート色のパンケーキ。

「わあ！ はる君が作ったの？」

「うん、ブラウニーっていうんだ。よかったら皆で食べてくれないかな？」

「いいけど、塩と砂糖を間違えてないでしょうね？」

「それは二年生の頃の話だよ。大丈夫、大丈夫」

「ねえアリサちゃん、二年生の頃にはる君のお菓子食べたの？」

なのはの知らない出来事を笑顔で語る二人に思わず尋ねた。

「えっとね」

「ストップ！ 恥ずかしいから黙ってなさい！」

「なんで？」

「いいからっ！」

話そうとした春季をアリサが顔を真っ赤になりながら止めた。その様子に胸がもやもやしてくる。

「お姉ちゃんに隠し事するなんて悲しいなあ。すずかちゃん、はる君が突然姉離れしちゃたよー」

嘘泣きをしながらすずかに抱きつくくと、彼女は困ったような笑顔でなのはの頭を撫でた。

おどけてはいるが、もしかしたら。

なのはは嫉妬していたのかもしれない。

秘密を共有する春季とアリサの両方に。

「あはは……とりあえず、どうぞ」

今度こそ春季はお皿を皆に差し出す。

揃っていたいただきますといつてから彼が作ったお菓子をパクリと口に含んだ。

最初に感じたのはブラウニーの上にまんべんなく広がるチョコレートのパリツとした歯ごたえ。

咀嚼するとふわりとした生地の中に挟まった胡桃の食感。

少し甘みが強いその味はなのは向けにミルクチョコレートを使ったのだろう。

「美味しい！ はる君、これ美味しいよ！」

「ま、まあまあね。ハルも進歩してるじゃない」

「アリサちゃんも素直じゃないね。うん、美味しいよ」

高評価を得て春季は安心したようで、少し照れながら微笑んだ。

「可愛いねー」

「すずかすずか！ 私にもユーノ撫でさせてよ」

「はい、アリサちゃん」

たらい回しにされながら頭を撫でられたり春季が持ってきたお菓子をユーノに与えるなんとも平和な光景。

『ぐにゅ……なのはあ助けてー』

思わずなのはに送る念話も覇気がない。

ブラウニーを食べた時はこんなに美味しいお菓子を食べたのは久しぶりだと瞳を輝かせていたのだが。

『なのは？』

念話の返事がこない。

よく見るとなのはは眠たそうに頭を揺らしていた。

『なのは！』

「なのは、大丈夫？」

『にやつ！ な、なに？』

ユーノと春季の念話と声にやっとな気が付いたようだ。

やはり相当疲れている。

そして無理もないかと、ユーノは自責の念にかられる。

いくら凄い魔法の素質を持っていたとしても彼女はまだ子供だ。

『今日はジュエルシード探索は休みだし、疲れも溜まってるみたいだから早く休んだ方がいいよ』

『そう、だね……』

弄られながらも聴覚だけはなのはと春季の会話を捉える。

どうやら春季もなのはを休むよう勧めたようだ。

彼の助けも手伝って納得したなのはは席を立ち、三人に別れを告げて翠屋を後にした。

走っていた。

後悔していた。

「私っ！ 気付いてたのにつっ！」

家に帰ってベッドで寝ていたのはを叩き起こしたのは発動したジュエルシードの反応だった。

慌ててユーノと共に走り出したのだが、道中でユーノに心情を吐露する。

あの時の男の子がジュエルシードを持っていたのは見間違ひなんかではなかったのだ。

すぐに話しかけて譲ってもらうべきだった。

後悔した所で時は戻らない。

今は急いで走るしかないのだ。

「ひどい……」

遠目からもよくわかるように上ったビルの屋上。

その場所から広がる光景になのはとユーノは言葉を失った。

薙ぎ倒され倒壊したビルの群れ。

ジュエルシードが何らかの願いを叶えた事を現す街中に悠然と佇む巨大な樹。

大惨事なのは一目瞭然。

「多分、人間が発動させたんだ。強い願いを持ったモノが発動させた時、ジュエルシードが一番強い力を得るんだ」

ユーノの説明も耳に入らない。

唇を、己の愚かさを噛み締める。

そんななのはの様子に掛ける声が見つからないユーノは心配そうに彼女を見つめた。

今はとにかくできることをやらないと！

首にかけてレイジングハートを取り出す。

「レイジングハート、お願い！」

『Stand by Ready Set up』

オレンジ色の私服から学校の制服に似た白い衣装に。

その手に握られた彼女だけの魔法の杖。

なのはが普通の女の子から魔法少女へ変わったのだ。

「ユーノ君、教えて……こういう時はどうすればいいの？」

「なのは？」

「ユーノ君！」

鬼気迫る、だが、今にも泣き出しそうな表情で問われ、ユーノは慌てて答えを返す。

「こういう時は元となった部分を見つけないとならないんだけど…

…」

そういつて大樹を見る。

これだけの被害を引き起こした大樹が根を張った範囲は広い。

これだけの範囲から元となった部分を見付けるのは至難の技だろうと胸中で呟く。

しかし

「元を見つければいいんだね」

「えっ」

なのははユーノの言葉を頼りにそんな事をいいのけた。
レイジングハートがなのはの意思に呼応する。

『Area Search』

なのはを基点に桃色の魔法陣が広がった。

「リリカルマジカル！ 探して、災厄の根源を！」

呪文を唱え、魔法陣をレイジングハートで軽く叩く。

すると幾重もの桃色の帯状の魔法が大樹の周囲を探索し始めた。

目を瞑り集中する。

頭に送られる情報を全て捌きながら目的の物を探す、探す探す探す

「見つけた！」

放った魔法から送られる映像の一つに映る光の繭に包まれた男の子
と女の子。

「すぐ封印するから………！」

「ここからじゃ無理だよ、近くにいかなきゃ」

「できるよ！ 大丈夫！」

そういつてなのははレイジングハートを掲げる。

「そうだよね、レイジングハート」

『Shooting Mode Set up』

なのはが優しく訊ねると、彼女の信頼に応えるかのようにレイジングハートの形が変わった。

デバイスコアの上下から突き出す槍のようなそれに、そして桃色の羽が力強く放射状に展開する。

「行って、捕まえて！」

レイジングハートの先端の円環が回る。

そして放たれたのは桃色の砲撃。

周囲の光さえ奪う桃色は、確かに光の繭を捉えた。

『Stand by Ready』

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル10 封印！」

再び放たれる桃色。

守る物など何も無い災厄の種は、なのはの魔法に抗うことなど出来ない。

『Sealing』

次の瞬間、眩い桃色の閃光が街を包み込んだ。

『Receipt Number X』

消え去った大樹。

ジュエルシードが封印された証拠だった。

デバイスコアにジュエルシードが収まり、排熱機構が展開。

蒸気を吹き出した後、レイジングハートは赤い宝玉に戻った。

（僕には使えない遠距離魔法……この子の魔法の才能は本当に凄い。

そして弟の春季の注意してみないとわからないほど低い、奇妙な魔力……魔法文明のない世界でこれほど魔力を持つ人がいるなんて……)

「沢山の人に迷惑、かけちゃったね……」

「なっ、なにいつてるんだ。なのはちゃんとしてくれているよ！」

ユーノはそういつて励ますが、なのはは俯いたまま顔を上げない。

「私、気付いてたのに……気のせいだと思っちゃって」

「なのははちゃんとしてくれているよ！それに、元々は僕の責任なんだ……僕がしっかりしていればこんなことには……」

今だけは。

ユーノは魔法を使えない春季を羨んだ。

きつと、春季なら彼女の悲しみに寄り添い、支えてくれると思ったから。

「ユーノ君！」

「っ！」

己の無力さを味わっていたユーノをなのはが呼び戻す。

「これは！一日に二回もジュエルシードが！」

魔導師としての知覚が別の場所で発動していたジュエルシードを今さら感知したのだ。

「行こうよ！ユーノ君！」

「うん！」

それは少女の歪みを更に深く、複雑にしていく。
誰にも知られる事もなくゆっくり、ゆっくりと。

第7話 失敗と決意？（後書き）

なのは視点な7話でした。

本当は6・5話にしようかと思ったんですが、春季もいるし話した
しいいかー

ってな感じで7話になりました。

第8話 蛇はしつこい？

どれくらいこの場所にいたのだろうか。

すでに涙は枯れ果て、少年の手元にある包み紙は彼の心のようにぐしゃぐしゃに丸められていた。

「……なんでなんでなんでっ！ あんな奴があの子の隣にいるんだよ！」

穏やかな川のせせらぎが聞こえる河川敷。

そんな場所にいなながら少年は川とは違って荒れていく。

今日、好きになった女の子に告白しようと意気込んでいたのだ。

そのために友達に頼んで女の子達に人気がある物もリサーチし、プレゼントも用意した。

彼女が喜んでいる顔を想像して自分も幸せな気持ちになった。

それを決して想像だけで終わらせるつもりも更々なかった。

一世代の決心をしてサッカーの試合観戦が終わって告白したのだが。

『ごめんなさい。私、好きな人がいるの』

この言葉で彼の恋は終わりを告げたのである。

そんな彼女はサッカーの試合中にゴールキーパーをしていた上級生と仲良く歩いて行ってしまった。

思えば初恋だったのだ。

あの子の隣は自分がいるはずだった。

いや、いなければならぬ！

かくして、少年の良くも悪くも幼い恋心の暗い願いを、偶然川に落ちていた災厄の種は聞き届けた。

届いてしまったのだ。

+

春季が友達を見付けたのは河川敷に着いてすぐだった。

草むらに座りながら吐き出す言葉に声をかけるのを躊躇わせる。

しかし、そんな少年に異変が起こった。

突然川が光ったかと思つた瞬間、その光が友達を飲み込んだのだ。

友達が青い輝きに包まれていく姿を見せられ、春季は立ちすく

。

太陽の光すら塗り潰す鮮烈な青に思わず目を瞑る。

やがてそれが晴れた時。

『グウオオオオオオオツ!!』

張り裂けそうな巨大な咆哮をあげるそれは大蛇であった。

とぐるを巻きながら河川敷の一面を陣取る体軀をびっしり覆う青い鱗。

口元から覗く牙は細く鋭く、ちろちろと出入りする舌は獲物を求めている。

極めつけはその目だ。

大蛇の身体と比べても小さい目は見る者を恐怖の渦に叩き落とす一種の魔眼。

魔眼に睨まれた春季もまた、身体が固まったかのように身動きがとれなかった。

動いてしまったらその瞬間にあの巨体が襲ってきそつな命を握られた感覚。

「あ……ああ……」

逃げると理性が訴え、本能が動くなと命令する。

相反する信号に、結局彼の身体は本能が勝りその場に留まった。

『シャー——ッ！』

やがて動き出す大蛇。

ゆっくりと、だが、確実にその巨体がうなりながら行動を開始した。

食べられるっ！

死を覚悟した瞬間だった。

ようやく、身体が束縛から解放される。

だが逃げようとした彼の意味とは反して身体は身を竦めて顔を腕で塞いだけ。

『フシュー……フシュー……』

空気が口から漏れ出す音が遠ざかった……気がした。

恐る恐る顔をあげる。

「えっ……いない……?」

大蛇は探すまでもなく、草むらを蹂躪しながら川沿いを進んでいた。

「っ……」

死の恐怖から解き放たれ、春季はその場に崩れるようにへたりこんだ。

彼の瞳は潤んでおり、今にも零れそうな涙をなんとか飲み込む。

恐かったけど……漏らさなくてよかった。

そんなずれた感想を抱き、彼が慌てて大蛇を追い掛けたのはそれから3分後の事だった。

+

「これは……」

ジュエルシードらしき魔力を感知し、その場所に向かっていたフェイトは飛行魔法中にその場で急停止した。

ジュエルシードの反応を別の場所で感じたのだ。

別行動中のアルフから慌てた念話が届いたのはそんな時だった。

『フェイト! ジュエルシードがっ!』

『うん、私も感じた。……こっちの方が近いね。アルフは先に向かって、私もすぐにいくから』

『りょーかいつ!』

一度に二個の反応。

わずかに躊躇し、彼女は使い魔であるアルフに先行をお願いした。距離的に後に発動したジュエルシードがアルフと現在地が近いことからの判断だった。

頼もしい返事に気を付けてと最後に付け加え、彼女は先に発動したジュエルシードに向けて飛行魔法を再開した。

+

「止まって！ 止まってよっ！」

変貌した友達を春季は追っていた。

春季の走る速さは小学生にしては速いものだったがやはり体格の差か、大蛇はどんどん先へ行ってしまう。

このままでは河川敷から出てしまう。

春季が速度を更にあげようとした時、それはやってきた。

「ちよつと待ったああっ！」

オレンジ色の何かが大蛇を跳ねた。

春季にはそうとしか理解出来なかった。

+

（これは大きいねえ）

魔力と飛行魔法の速度が籠った右ストレートを大蛇の頬に叩き込んだアルフは改めて見る大蛇の大きさに舌を巻いた。

意外とダメージが大きかったのか、倒れたまま動かない大蛇をこれ

幸いと魔力を持たぬ者を弾く結界魔法を発動させる。

「これで思いっきりやれ……ん？」

景気よく拳で手の平を叩いたアルフの目に飛び込んできたのは遠くから走ってくる少年だった。

「なんで……まさか魔導師か！」

この場にいられてあの怪物に近寄ろうとするのは魔力を持つ者だけだろう。

そこから導き出される答え。

あの少年が魔導師かそれに準じる何か、という事だ。

だが、ジュエルシールドを渡す訳にはいかない。

自分はフェイトを助けるために存在するのだから。

少年を足止めしようとバインドの術式を編んだ、その時。

『グウオオオオオオッ！』

「ちいっ！」

倒れていた大蛇が唸りと咆哮を上げてアルフを目掛けて襲い掛かってきた。

間一髪でそれを避け、空を蹴って大蛇を急襲。

右ストレート、左ストレート、右左右左右左 止めとばかりに放

たれた強烈なアッパーカット。

魔力で強化したパンチの応酬に、大蛇はのたうち回る。

「へんっ！ ジュエルシールドってのも大したことないねえ」

ニヤリと歯を見せて笑うアルフは少年に向き直り、バインドを編む。

(そこで大人しくしてな！)

バインドを発動しようとして

「危ないっ！」

少年特有の高い声がアルフの耳に届いた。

次に来たのは背後からの衝撃。

「
！」

声にならない悲鳴を上げながら、アルフを堪えようとし　そのま
ま吹っ飛んだ。

きっと数瞬後には彼女の身体は固い地面に吸い込まれてしまっただろ
う。

アルフはそれに備え、腕で頭を庇って身を固くした。

「っ！」

しかし。

地面に激突した衝撃はいくら待ってもこない。

背中に有るのは何かを下敷きにしたまま寝たような違和感。

「なっ!?!」

慌てて身体に敷いているモノを見て、アルフは驚愕した。

春季が見た『オレンジ色の何か』の正体は女性だった。オレンジ色の髪とメリハリのある身体を持ったとびきりの美女。街を歩けば誰もが目を奪われるだろう。美女の頭から生える犬のような耳と尻尾の位置のこれまた犬のような尻尾に。そんな犬耳と尻尾を生やした美女が空に浮いている……。次から次に襲う非日常な出来事は春季の脳の処理能力を越えていた。

（一体なんなんだ！）

いっそ叫びたい気分だったが、それを堪える。全力疾走を続けて呼吸すら一生懸命な状態でなかったらば、きっとそうしていた。

彼が懸命に走る最中にあっても事態は動く。

なぜかこちらを向く美女目掛けてダメージから回復した大蛇が再び襲い掛かったのだ。

だが美女は飛び掛かってきた大蛇を避け、目にも止まらぬ華麗なラッシュをお見舞いした。

猛攻を受けた大蛇はひっくり返つてのたうち回る。

（凄い！）

現実離れた攻撃を見て春季はその攻撃を受けたのが友達であることも忘れて見惚れた。

大蛇達との距離が数メートルまで縮まった所で、改めて美女がこちらを見た。

何かするつもりなのか右手手を翳した彼女を眺め

「危ないっ！」

叫んでいた。

見てしまったのだ。

無差別に猛威を奮う大蛇の太い尾が、偶然にも彼女に襲いかかるのを。

春季の声にハツとした様子の美女だったが、もう間に合わない。だから。

「っ！」

走った。

危険なんじゃ。なんて考えはなかった。

とにかく無我夢中で春季は走った。

急がなければ彼女は地面に叩きつけられてしまう。

後三步、二歩、一歩！

目を瞑って彼女の落下予測地点に飛び込み。

果たして春季は間に合った。

背中に伝わる確かな衝撃。

小柄な彼に覆い被さるように美女は春季の上に存在していた。

柔らかい大人の感触に痛みも忘れて赤くなる春季がこの場には似つかわしくなかった。

+

アルフは背中では自分を受け止めてくれた少年に驚愕していた。

「だ、大丈夫かい!？」

「いてて……なんとか、大丈夫です」

慌てて少年を助け起こし、その姿を見る。

なぜか赤くしている顔は幼いながらに将来を感じさせる端正な顔立ち。

そんな少年が着る紺色のジーンズと白いTシャツの上から着ていた黒いパーカーは土と草に汚れてしまっていた。

まじまじと観察してから気付く。

少年のとても魔導師など務まりそうにない、あまりにちっぽけな魔力に。

「あの、お姉さんも大丈夫ですか？」

「あ、ああ。私は大丈夫さ」

意識を戻すと少年の心配に彩られた顔が間近にあつて、咄嗟に答える。

認めよう。

この少年はアルフが張った結界に巻き込まれてしまっただけの一般人だ。

「助けてくれたのには礼をいうけど、すぐにここから離れな」

いつの間にか大蛇はこちらを睨んでいた。

痛む身体に鞭を打ち、構えを取る。

庇ってくれた少年に対する詫びも兼ねて、さっさとあの暴れん坊を

沈めなくてはならない。

「それが……」

少年の声が聞こえる。

だが、今は目の前の敵が最優先だ。

大地を踏み締め、走り出す。

つもりで、不意に続く少年の言葉が耳に入ってしまった。

「足を挫いてしまったみたいで……」

「なあっ！」

盛大に転げる。

「何してんだい！ って私のせいじゃないかあっ！」

「ご、ごめんなさい。でも自分から飛び出したから気にしないでください」

「そ、そうかい？ すまないね……」

状況も忘れて謝罪し合う二人。

そんな彼らに近寄る空気の読めない蛇クン。

『フシユー……フシユー……』

「今はこんなことしてる場合じゃなかったね」

「はっ、はい」

大蛇はやつと獲物を追い詰めたばかりに、いやらしく笑った……
気がしたのは二人の共通認識。

ふと見ると少年はかたかた身体を震わせていた。

きつと恐いのだろう。

こんな怪物に睨まれているのだから仕方のないことだ。

だからこそ。

アルフは座り込む少年を守るようにファイティングポーズをとった。

「お姉さん!？」

「悪かったね、巻き込んだじゃって」

少年は身を張って自分を助けてくれた。

その借りを返すだけだ。

舌なめずりする大蛇はもう獲物を追い詰めたと思っているらしい。

だが、その獲物が強靱な牙と鋭い爪を持っているとは夢にも思えない。

大蛇の口があんぐり開かれる。

アルフの体に魔力が再び廻る。

そして

「お姉さあああんっ!」

少年の叫びは大蛇の咆哮と轟音に掻き消された。

第8話 蛇はしつこい？（後書き）

書いて投稿してから思ったんですが、アルフって結界使えတာっけか……うーむ

掲載しましたが、誤字を見付けた為修正しました。

第9話 再会とはじめての魔法？

「いくよ、バルディッシュ」

『Photon Lancer Get set』

可憐な声と無機質で男性的な低い音声が、大蛇の咆哮の中で静かに響く。

悪戯に吹く風に美しい金髪と見に纏う黒いマントを弄ばれる少女は、使い魔と顔見知りの少年を襲う存在に怒りを込めて魔法を放った。

+

美女越しに見えたその光景にもはや言葉を失うしかなかった。

蛇に食べられそうになったら、先日知り合った女の子がなんとも奇妙な格好 いや、あれはあれで可愛らしいのだが で空を飛びながら電撃を飛ばして蛇をしばいた。

起こった出来事を頭から書き出してみると荒唐無稽この上ない。今ならなのはから『私、空を飛べるの』といわれても受け入れられる気がする。

現実逃避に走る春季の脳裏には、にやははーと笑いながらユーノと共に空を駆けるなのは姿が浮かぶ。

……違和感がないのはなぜだろう。

「フェイト！」

「アルフ。良かった、無事で」

希望に満ちた声でフェイトを呼んだのは美女 アルフだ。

姉妹だろうかと考え、今はそれより大事なことがあったのを思い出

す。

雷が大蛇を貫いたのだ。

友達は無事だろうか。

傷む身体を堪えつつ、春季は大蛇へと近付く。

「ちょっと待って、はるき」

そんな彼を呼び止めるフェイト。

疑問と心配の感情が見え隠れする彼女の視線が春季を貫いた。

「どうしてはるきがここにいるの？」

「それは……」

正直にいつていいものか迷う。

友達が青い光に包まれて化け物になってしまったので追い掛けてた、と。

「フェ、フェイト！ 今はジュエルシールドを封印しようよ！」

「アルフ……うん、そうだね。はるきは少し離れてて」

「う、うん」

何が起こるのかわからないが、とりあえず大人しく従う。

「バルディッシュ」

『Sealing form Set up』

フェイトの言葉で彼女が持つ黒い斧

彼女が呼ぶにはバルディッ

シユ　　の形が変わる。
長い柄はそのままに斧から槍型に変わり、金色の光の羽が四方向に広がった。

「捕獲します」

その声と共にバルディツシユを地面振り下ろし雷撃が走る。
やがて地面を砕きながら大蛇を包囲、そして空から降る金色の魔方阵。

「ジユエルシード、シリアル5封印」

『Yes sir Sealing』

春季に見えたのはそれが大蛇を押し潰した、そこまだった。
辺りに広がる金色の闇に思わず目を瞑ったのだ。
腕で顔を庇いながら光を耐える。

『Captured』

目を開けた時、全て終わっていた。

大蛇の姿は消え去り、大蛇がいた場所に横たわるのは……

「っ！　大丈夫!？」

苦悶の表情のまま眠る友達の姿だった。
大股で駆け寄り外傷がないか確認する。

「……よかった、怪我はないみたい」

一通り確認して安堵の溜め息を漏らした。

「多分、すぐに目覚めると思う。だから話してほしい、なぜはるきがここにいられるのか」

「いられるのかって……僕はただ、蛇になった友達を追ってきただけだよ。それで、そのお姉さんに助けて貰って……」

「アルフが張った結界に弾かれなかった……？」

警戒も露なフェイトの視線に真っ向から見つめ返す。

にらみ合いがしばらく続き　フェイトが口を開いた。

「魔力が少なすぎる。……はるきは魔導師じゃないの？」

「ま、魔導師？」

犬耳お姉さんに続いて空飛ぶ女の子、そして最後には魔導師。いい加減春季の脳ミソも爆発しそうだった。

「僕はただの小学校だよ」

「そう……ごめんなさい、疑ったりして」

どうやら疑われていたらしい。

よくわからないが謝られたのだから気にしていないと返した。

そしてあわあわと成り行きを見守っていたアルフが口を挟んだ。

「フェイト、ソイツ私を庇ってくれたんだよ」

「はるきが？　そっか、ありがとう、はるき」

「う、ううん。助けてもらったのは同じだから。フェイトにお姉さんもありがとっございました」

互いに頭を下げあい、感謝を述べあう。

まるで前回の謝罪合戦のようだと春季は少し笑った。

「ところでフェイト。ソイツなんだけど」
「アルフ、ソイツじゃなくてはるきだよ」
「そのハルキとはいつ会ったんだい？」
「ふう……この前の青い石をくれたのがはるきなんだ」
「へえー、あれをねえ。縁つてのはわからないもんだね」

じろじろ見られて思わず身を縮ませる。

「そうだ。はるきからもらった石なんだけど」

「えっ？」

「私が探している物とは違ったんだ。だから返すね」

「そうだったんだ。わかったよ」

助けてくれた恩人の助けにはならなかったのは残念だが、違つのなら仕方がない。

「あれ……」

スカートのポケットを探っていたフェイトの動きが止まった。

「あの石なら家に置きっぱなしじゃないのかい？」

「そうみたい……ごめんなさい、はるき」

「き、気にしないで」

別に元から欲しかった訳じゃないから。

喉まででかかった言葉を飲み込む。

フェイトが探している青い宝石が危ない者ということとはよくわかった。

きつともう、手伝うといつてもフェイトはその申し出を断るはずだ。だから、卑怯だと感じながらも、繋がりを消したくはなかった。

「返してくれるのはいつでもいいよ」

「……ありがとう」

「ならハルキに念話を教えたら？ これなら連絡も取りやすいよ」

「そうだね」

念話とはなんだろうか。

話しについていけない春季をよそに、二人の話しは続く。

「でも魔力がかなり少ないけど大丈夫かな」

「うーん。なんか妙な感じの魔力だけど念話くらいならいけるよ」

「あの、念話って？」

「あつ、ごめん。念話っていうのは」

「待った、フェイト。直接やった方が早いよ」

やった方がって何を？

疑問は尽きることはなかったが、次の瞬間全てが吹き飛んだ。

『はるき、聴こえる？』

「ほわあっ！」

頭に直接響くフェイトの声にすつとんきょうな悲鳴をあげてしまう。腹を抱えて笑うアルフに恥ずかしさを感じつつ、続くフェイトの言葉を待つ。

『これが念話。離れてても話すことが出来る魔法なんだ』

『これが魔法……』

驚く春季を見つめていたフェイトも驚いたような表情をした。

「すごいね、もう出来るようになるなんて」

「えっ！」

「へえー、魔力はちつともないくせに筋はいいんだねえ」

「アルフ。そういう風にいっちゃダメだよ」

アルフの言葉もフェイトの言葉も頭に入らなかった。

（僕が……僕が魔法を使ったんだ）

ファンタジーでしかあり得ない想像が産み出した幻想の力。

そんな物が本当にあつて、しかもそれを自分が使えたとあつては幼い春季からしたら凄く興奮する出来事だ。

「すごい！ 僕が魔法を使えたんだ！」

「えーと、ハルキ。一応いっておくけど誰にも魔法が使えるなんていっちゃダメだよ？ それと私達がジュエルシードを集めてるってこともね」

「えっ？ どうしてですか？」

ジュエルシードのことはなんとなくわかる。

先ほどの大蛇のような怪物がいるのだから、仮に春季が探索の手伝いを誰かに頼んだのなら、その誰かを危険に巻き込むかもしれないと。

しかし魔法のことはよくわからなかった。こんなにすごいことが出来たのだから、なのはや恭也達にも教えてあげようと考えていた矢先にこれだ。

「そういう決まりなんだ。はるきの場合、私達が魔法を使ったのを

見たから」

特別だよ。

そういつて微笑むフェイトに、なぜか春季の胸が高鳴った。

「だから誰にもいわないでね？」

「わ、わかった。絶対誰にもいわない」

顔が火照ってくるのを自覚しながら何度も頷く。

大丈夫、もう夕方だから顔が赤くてもバレない。
というかバレないで。

「よかった。それじゃあ私達は帰るね」

そういつて、フェイトとアルフはふわりと宙に浮いた。

「ハルキ、今日はありがとね」

「いつ、いえ」

「何かあったら念話で知らせてね」

「うん……」

「それじゃあ……」

飛び立とうとしたフェイトを見た。

「フェイト！ アルフさん！」

口が勝手に呼び止めていた。

訝しげに見つめる二対の視線に言葉を探す。

「その、また、ね」

出てきたのは当たり前障りのない別れの言葉。

ただ、それが意味するのは

「うん、またね」

「またねえ！」

再会を望む別れの言葉。

今度こそ飛び立つフェイトを見送り、春季は綻ぶ顔を右手で隠した。誰も見る者はいなかったが、なんとなく気恥ずかしかったのだ。

徐々に遠ざかる二人を見詰め、心の中でもう一度呟いた。

またね、と。

それから友達が目を覚ましたのはすぐの事だった。

自分が大蛇になったことを覚えていなかったのは幸運だったが、彼を家に送る際に失恋話を泣きながら語られたのは……

まあ、すっかり日も落ちてから家に帰った春季を待っていたのは門限を破った彼に対する恭也からのお説教と、足を挫いたことで心配したなのはこの過保護ともいえるほどに手厚い看護だった。

あまりに心配するなのはお風呂と一緒にと言い出したのは顔が真っ赤になるほど焦ったが、恭也の説得もありなんとか理解いただけ

魔法が使えた喜びもお説教やらなんやらのせいでなくなり、ほんの少し泣きたくなった春季であった。

おまけ

その頃のフェイトとアルフ。

遠見市のマンションに戻ってきたフェイトは食べ終わったコンビニ弁当の容器と一緒に置いてある青い石を見つめていた。

「ハルキ、いい奴だったね」

「うん、そうだね」

背後からいきなりかかったアルフの声には驚かない。

そのままぼんやり石を見つめ 次アルフの言葉でフェイトの顔が引き締まった。

「ジュエルシードも早速手に入ったし、この調子ならすぐに集まりそうだね。それよりご飯ご飯」

「油断はダメだよ、アルフ」

「どうしたんだい？」

凜としたフェイトに、いそいそとドッグフードの箱を取り出していたアルフは思わず訊ねた。

「最初に発動してたジュエルシードなんだけど、アルフとの念話を切ってからすぐに反応がなくなったの」

「それって!」

皆までということなくそれを理解したらしいアルフに頷いてみせる。

存在するのだ。

「私達以外のジュエルシード探索者 魔導師」

第10話 腹痛と月村家？

春季はなのはや恭也、そしてユーノと共にバスに乗っていた。目的地は月村家。すなわちすずかの家だ。

「うう……」

そして春季は唸っていた。強烈な腹痛で。

この世の終わりを目にしたような表情でお腹を押さえる春季に、隣に座るのはが心配そうに声をかけた。

「はる君、大丈夫？」

「薬は飲んだから……大丈夫だよ」

言葉とは裏腹に顔を真っ青にするこの有り様では説得力の欠片もありはしない。

一つ後ろに座る恭也も見かねたようにいった。

「あれを無理して食べるからだ。キツイようなら先に帰るか？」

「それは絶対ダメ……後が怖いから……」

恭也のいうことを拒否し、春季は堪えるように低くうなった。すずかの家に呼ばれた切っ掛けは数日前に遡る。

あれは魔法との邂逅から三日が経った日だった。アリサやすずか、他の友達からの誘いを断り春季は街を歩き回っていた。

目的はもちろんジュエルシードだ。

恩人のフェイト達にせめてものお礼としてジュエルシードを渡すために彼女達には内緒で探しているのだが、中々見付からない。まあ優秀な魔導師であるフェイトとその使い魔であるアルフが揃って探しているのに見付けていないのだから、魔法と念話を知っただけの小学生が易々と見付けられるはずもない。

そういえば、彼の念話は些か不安定だった。魔法を知ったその日の夜に早速試してみたのだが『こんばんは』と念じた春季の中だけで虚しく響くだけだった。

圏外なのかなあとの外れな感想とせつかく使えた魔法が使えなくなった落胆でその日は眠った春季だったが、次の日に少し困ったようなフェイトからの念話が届いた。

真夜中の念話はさすがにやめて欲しいとのことだったが、春季が念話したのは夜の九時。

真夜中といえる時間ではない。その旨を伝えると、アルフと話しをして考えるといって念話を切ったのだ。

それから三十分ほどで念話が届いた。

フェイトとアルフ曰く、おそらく魔力があるかないかのギリギリのラインにあるから念話が不安定なのではないかといった。

そうなるなら現在のスムーズな念話はなぜかという疑問もわいたが、それもフェイト達は一度、受信側になることで不安定な交信を円滑にしている……のかもかもしれないといていた。

それはさておき。

そんな訳で友達付き合いが疎かになっていた春季をアリサが極めて素晴らしい笑顔で誘ったのだ。

『来ないと次あった時に恐いわよ?』

元来女性には弱い春季だ。
背後に阿修羅の影が見え隠れするアリサに抗う術は持ち合わせていなかったのである。

ちなみに腹痛の原因は、春季が趣味にしているお菓子作りに闘争心を燃やした美由希が今朝作った、この世すべての悪といえますか産業廃棄物といえますか、とにかく彼女が作ったお菓子を食べたからだったりする。

料理が壊滅的に下手な美由希の手作りの品をのらりくらりと遠回しに遠慮した兄妹のあおりを受けたのだ。

頑張つて作ったのだからと決死の思いで飲み込む春季を見つめる兄妹の視線はやたら生暖かった。

回想を終わらせ、お腹の痛みが和らいだので春季は気になっていたことを切り出した。

「でも、なのはも大丈夫？」

「ふえ？」

何のことかわからないようなので、一応いっておく。

「最近ポーツとしてるのが多くなっただっていうか……疲れてるみたいだから」

「あ……」

春季の言葉を理解したらしく呆けた顔を見せる、が、すぐさま一転し、笑顔に変わった。

「大丈夫だよ！ ありがと、はる君」

「大丈夫ならいいんだ。でも、無理はしないでね」

「無理といえば」

背後から恭也の音がする。

「近頃は何かと物騒だ。お前達も巻き込まれないように注意しろよ？」

もう巻き込まれてます。

なんていえるはずもなく、互いが別のことを隠している二人は揃って返事をしたのだった。

「いらっしやいませ。恭也様、なのはお嬢様、春季様」

すずかの家についた三人は月村家のメイド長をしているノエルに出迎えられ、案内されていた。

あまり感情を出さないが、優しく綺麗な女性だ。

(相変わらずおっきいなあ)

ノエルに先導されながら内心呟く。

洋風の屋敷と広大な庭はもう何坪あるのか数えるのが馬鹿らしくなるほどだ。

高町家も広い家に敷地内に道場まであるので中々の大きさなのだが、それすら霞む豪華な内装に胸中での呟きは呆けた感じのものだった。

やがてある一室の前に来るとノエルがその扉を開く。

中にいたのはすずか、アリサ、そしてすずかの姉であり恭也の友達の忍だ。

三人が三人共優雅にティーカップを傾ける様はまるでお嬢様のようにだった。

まあ本物のお嬢様なのだからそれも当然だが。床では子猫達が無邪気に遊んでいる。

猫好きのすずかが捨て猫や野良猫を拾って世話をしたり、里親探しまでしているのだ。

「あ、なのはちゃん、はるき君、恭也さん」

「なのはちゃん、春季君、いらっしやい」

なのは達に気が付いたすずかとメイド服の女性、ファリンが挨拶をする。

すずかの専属メイドを務めており、ノエルの妹だがしっかり者の姉と明るいが少しドジな妹と正対な女性だ。

そんな彼女達に挨拶をして、春季となのははすずか、アリサがかけるテーブルへ。

そして兄の恭也はといえば。

「やっぱりなのは達のお兄さんとすずかのお姉さんは仲がいいわね」

忍と腕を組みながら彼女の部屋へと行ってしまった。

ただの友達には見えないが、まだ付き合っていないのだから驚きだ。

友達以上恋人未満といった関係だろうか。

抱いた猫を撫でながら、すずかは笑う。

「恭也さんと仲良くなってから、お姉ちゃん幸せそう」

「うちのお兄ちゃんは……どうかなあ」

「恭也兄さんも柔らかくなった気がするよ」

「そだね。剣一筋って感じだったのに」
「そう、だね」

剣と聞いて、春季はほんの一瞬だけ顔をしかめたが、すぐに笑顔
浮かべる。
ひとしきり笑い合う四人。

「今日は誘ってくれてありがとう」
「あ、僕まで呼んでくれてありがとう」
「うっん。こちらこそ来てくれてありがとう」

アリスの怒りが恐くて来ましたが、とはもちろんいえるはずもない。
春季は曖昧に笑った。

「今日は元気そうね」
「え？」
「最近、なんだかなのはちゃん元気がないみたいだったから……は
るき君も忙しいみたいだし」
「う……ごめん」

いくらジュエルシード探索とはいえ、やはり友達は大切だ。
これからは気を付けようと反省する。
なのはは心配してくれる友人に感動していた。

「ユーノ、おいでー」
「キュッ」

談笑する三人の女の子から離れ、春季は床に座り込んで猫に追いか
けられていたユーノを呼ぶ。
家では女性陣がユーノを独占してしまうので、今のうちに遊ぶつも

りだ。

「お前、可愛いねー」

頭を撫でるとくすぐったそうに身をよじらせる。

それが可愛くてまた撫でてしまう。

一種のループが誕生だ。

「なのはちゃん、春季君。お茶とお菓子をお持ちしましたよー」

ユーノと遊んでいるとファリンが戻ってきた。

手にはティーポットとカップ、クッキーが載ったお皿が置いてある。

「ありがとうございます、ファリンさん」

「ありがとうございます！」

「いえいえ。さ、春季君も座ってくださいねー」

「はい……っ！」

椅子に座ろうとした春季だったが、その時。

奴が襲ってきたのだ。

究極的かつ最強の痛みは春季の体を蝕む。

動きが止まった春季にアリサが気付いた。

「ハル、どうしたの？」

「う……ごめん、月村さん。ちょっとお手洗いを借りていい？」

「う、うん。どうぞ」

「あり……がとう……」

許可を得た春季はぎこちないが素早い動きで理想郷を目指したのだ。
った。

なのはは苦笑い、それ以外は心配そうに春季を見送った。

「はぁ……痛かった」

戦いを終えた春季はげっそりした顔で皆がいるであろう部屋へ戻っていた。

肩を落として歩く姿が、どこか哀愁を漂わせている。

「あつ、春季君」

「ファリンさん。どうしたんですか？」

とぼとぼ歩いていた春季に、ファリンから声がかかった。

「どこか痛そうでしたけど、大丈夫ですか？」

どうやら尋常ではない春季の様子を察して、わざわざ見に来てくれたようだ。

そんな優しいファリンに、笑顔を以て答える。

「はい、もう平気です」

「それならよかったです」

ファリンもにつこり微笑み、言葉が続ける。

「すずかちゃん達はお家の前にいますよ」

「外にですか？」

「はい。せつかく晴れていますからね」

「わかりました。じゃあそっちに向かいますね」

「すぐにお茶を暖めなおしてお持ちしますね」

最後にお礼をいってから、再び歩き出した。

「やっときたわね」

「お帰りなさい、はるき君」

「ただいま」

家の外に出ると白いテーブルと白い椅子が置かれていた。

お茶を飲みながら猫と遊ぶアリサとすずかを眺めて、おや？と思う。

「なのはとユーノはどうしたの？」

「なのはちゃんならどこかに行っちゃったユーノ君を探しに行った

よ

「そうなんだ。一人で大丈夫かな」

「なのはちゃんが大丈夫って言ってたから、大丈夫じゃないかな」

和やかに会話をする二人にアリサが指を指しながら叫んだ。

「それより！」

いや、二人にはなく春季にだ。

どうでもいいが人に指を指しちゃいけません。

「な、なに？」

「アンタ最近なにしてんのよ」

最近？

最近はおっぱらジュエルシード探索に明け暮れている。

まあ、そのままいえないのでとりあえずは濁しておく。

「あー、最近ね。ちょっと学校外に友達が出来ただけど、その子の探し物の手伝いをしてるんだ」

「友達い？」

「へえー。はるき君、どんな子なの？」

「金髪で目が赤い女の子とつかい……じゃなくてオレンジ色の髪をしたお姉さんだよ」

使い魔がなんなのかは知らないが、おそらく魔法関係のことだろう。そういえばなのにもフェイト達のことを教えようとしていたのだが、すっかり忘れていた。

「なるほどね。友達の手伝いをしてたんなら私達も協力したのになえ、すずか」

「うん。はるき君、私とアリサちゃんにも手伝えないかな？」

「月村さん、バニングスさん……」

なるほど、なのはの感動はこういうことらしい。

温かくなる胸に心地よさを覚えるが、そんな優しい彼女達を危ない目に遇わせるわけにはいかない。

あの大蛇にしてもそうだ。

春季は運よくフェイト達に助けられたが、今度もそうなるとは限らない。

(あれ……？ 僕も結構危ないことしてる？)

今更ながら気付くが、それは置いておく。

「二人共、ありがとう。でも大丈夫だよ」

春季としては大切な友達を気遣ったつもりだったが、彼女達

特にアリサの 反感を買っただけだった。

彼女のイライラ指数が高くなるにつれ、形のいい眉と目がつり上がる。

「私達じゃ不満って意味いつ!？」

「ち、違うよ」

「アリサちゃん、落ち着いて」

春季に掴みかかりそうな勢いのアリサをさすが止めた。腕を掴まれて止められたアリサとはいえ今にも噛みつかんばかりの顔をしている。

若干、弱腰になりながらも春季は説明をする。

「その子がいつってたんだ。探し物のことを人に話さないでって」

「それはなんでか聞いてもいいかな？」

さすがの親切心から来る純粋な質問。

春季と見知らぬ人を心配しての言葉だけに、無下に切り捨てるのも躊躇われた。

「……ごめん、それもちょっと」

いえるはずない。

あの怪物にこの二人を近付けたくはないのだから。頑として譲らない春季。

アリサ達は深い深いため息をつき、折れてくれた。

「そこまでいうんなら無理には聞かないわよ」

「はるき君以外と頑固だからね」

「……ありがとう」

「そのかわり！ その子を今度紹介しなさいよ？」

「は、はいっ！」

背筋を伸ばして返事をする春季にすずかが笑う。

それにつられてはつが悪そうに春季が笑い、つんとそっぽ向いていたアリサも笑った。

いざこざがあったとしても、そこは子供達。

仲直りなんて簡単だ。

「キュッ！」

そんな和やかな空気の中にユーノが飛び込んできた。

「あれ、なのははどうしたの？」

「キュッ！ キュッ！」

どこか切羽詰まった様子のユーノが春季の周囲をぐるぐる走る。

「もしかして……なのはになにかあった？」

「キュッ！」

春季の問いにその通りとでもいうように鳴き、ユーノが走り出した。

「ユーノ！」

慌ててそれを春季は追いかけた。

だがその前にいっしておく。

「月村さん達は恭也兄さん達を呼んできて！」

一緒に走り出そうとしたアリサとすずかに告げ、脇目も振らずにユ
ーノを追いかけるのだった。

第10話 腹痛と月村家? (後書き)

やっとこさ第10話をお届けしました。

次の話は……どーしよ。

多分プロット通りになのは視点でフェイトとの出会いかなあ。
あまり弄れないのが残念ですが、なんとか形にしていけます。

第11話 子猫ともう一人の魔法少女？

ロストロギア、ジュエルシード。

動植物、善悪すら問わずに『願い』を叶える性質を持つ青い宝石だ。その性質上、いつ発動するかわからない。

なのはがそれを感知したのはアリサ、すずかと猫達と戯れている時だった。

『なのは！』

『うん！』

ユーノも気付いたらしい。

普段ならすぐにジュエルシードの場所に行く所なのだが……

『どうしよう……』

『そうだ！』

なのはの視線の先にはアリサとすずかがいる。

このままなのはがジュエルシードを取りに行ってしまうえば二人とも着いてこないとは限らない。

悩むなのはに、ユーノは名案とばかりに彼女の肩から降りると、そのまま走り出した。

「ユーノ君？ あっ………！」

「ユーノどうしたの？」

「なにか見付けたみたい。ちょっと探してくるね」

「一人で大丈夫？」

さすがの問いに笑顔で答えるとなのはも走り出す。
迷惑をかける訳にはいかない。

「ナイス！ ユーノ君！」

「えへへっ。それより……ここじゃ人目に付くかも。結界を張らなくちゃ」

「結界？」

「通常空間から特定の空間を切りとって、時間信号をズラす魔法。僕が、少しは得意な魔法」

足を止め、ユーノが魔法を構成する。

「あまり広い空間は切り取れないけど、この周辺なら！」

緑色の魔法陣が浮かび上がり、輝きを放つと世界が色褪せていく。

「この辺りのはずなんだけど」

キョロキョロ辺りを見渡すユーノ。

それにならってなのはも探す……

「ね、ねえユーノ君。あれ……」

までもなかった。

彼女が示す先にはもう突然変異ではすまねーぞ！っくらい大きな猫がいたのだ。

「おつきいねえ」

「多分、あの猫の大きくなりたかって思いを正しく叶えたんじゃないかな。襲ってくる様子もないし……なのは、お願い！」

「任せて！」

なのはが首元からレイジングハートを取り出す。

「レイジングハート！」

それをかざした瞬間、なのはの背後から雷光が迸った。狙いは巨大化した猫だったようで、寸分違わず吸い込まれるように命中した。

『にやおおおんっ』

「なっ！ 魔法の光！」

突然の衝撃によるめく猫。

なのはも慌てて振り向いた。森の向こうの外壁より少し離れた電信柱の上に、猫襲撃の犯人がいた。女の子だった。

赤い瞳に綺麗な金髪を黒いリボンでツインテールで結っており、黒いレオタードに似た体にフィットする衣装にピンク色のスカート。その上から纏う黒いマントと、同じく黒い長斧は可憐な少女の容姿とは裏腹になぜかよく似合っている。

高町なのはがもう一つの運命と出会った瞬間だった。

「バルデツシユ。フォトンランサー、連撃」

少女が静かに告げる。

漆黒の長斧はそれに応えたと先端に雷光が集った。

『Photon Lancer Full auto fire』

無機質な男性の音声の終了と同時に雷撃が放たれる。

「一つや二つではない、無数の雷の弾丸は次々に猫に命中していく。

『「じゃああっ！」』

耐えきれずに倒れ込むと、舞い上がる砂ぼこり。

それがきっかけとなり、なのはは硬直していた体を再起動させた。

「レージングハート！　お願いっ！」

『「Standby ready Set up」』

刹那の変身後、なのはすかさず魔法を発動させた。

『「Flier fin」』

（もう驚かないと思っていたけど……僕がなのはに教えられることはもうないのかもしれない）

白い靴の側面に一对の桃色の羽根が生え、ユーノとの魔法の特訓の成果は彼女の体を空に舞わせた。

よろよろ立ち上がる子猫を庇うように黒い少女に向き直り杖を構える。

『「Wide area Protection」』

晴天の下に顕現する広域防御魔法は少女から放たれるフォトンランサーを容易く弾いた。

だが、盾に死角があるように広範囲の防御魔法にも死角は存在する。黒い少女はその死角へとデバイスを向けた。

「……バルディッシュ」

『「Photon Lancer Get set」』

「あつ」

放たれたのは単発のフォトンランサー。
なのはの下を走りゆく雷撃は子猫の足元に直撃した。

『にゃああああつ』

「わわわっ!?!」

再度崩れ落ちる子猫。

巨体が倒れる際に生じた風により、なのはの華奢な体も体勢を崩し、地面に軟着陸する。ただ落下するだけでないのも、彼女の努力の成果だろう。

レイジングハートを黒い少女に向けながらも、なのはは改めて観察する。

(赤い綺麗な瞳に金色の髪の毛。多分、私やはる君と同じ年くらいだよな。……でもあの子の瞳……どこかで)

観察していく内に呼び覚まされるのは『高町なのは』の『高町なのは』たる原初の記憶。

深紅の瞳の奥にある昏く深い色。

あれとよく似た色をなのはは知っている。

そう、とてもよく……

「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス。もう一人のロストロギア……ジュエルシードの探索者か……」

「やっぱり僕と同じ世界の……それにあの子、ジュエルシードのことを知っている」

なのは過去の邂逅を打ちきつたのは件の少女とユーノの声だった。

少女は宙に浮かびながら、地面にて杖を構えるなのはを慎重に見つめていた。

「バル、ディッシュ……？ もう一人つて、もしかして河川敷のジュエルシードを回収したのは」

「私です。……申し訳ないけど、このジュエルシードも、いただいで行きます」

『Scythe form Setup』

会話が途切れる。

黒い少女のデバイス　バルディッシュが形を変える。

直角に伸びたボディの先端に収束された光の魔力刃を持ったバルディッシュは、正に死神の鎌といえる風貌。

彼女はそれを振りかぶり高速でなのはへと迫る。

「っ！」

『Evasion Flier fin』

咄嗟に反応出来たのは幸運だった。

レイジングハートは主の危険を逸速く察し、魔法を発動。なのはを空中へと逃した。

次いで聞こえたのは宙を風いだ風切り音。

少女の細腕で振るわれたにも関わらず、鋭い音を放った金色の刃は嫌が応にも恐怖を誘った。

だが、少女の攻撃は終わらない。

『Arc Saber』
「はあっ！」

短い掛け声と共に腰だめにバルディッシュを構え、それを振るった。収束された魔力刃がブーメランのように回転しながらなのはへ向かう。

「わわっ！」
『Protection』

先ほどの広域防御魔法とは違う個人用の防御魔法を実行。慌てながらの魔法は光の刃をしっかりと受け止め、閃光と爆音を発した。急上昇し、視界を確保。

「はっ！」
「うっ　　！」

高速機動した黒い少女がすでに待ち構えていた。バルディッシュをレイジングハートで受け止める。

「どうして？　いきなり、こんな……」
「……」

なのはの問いに対して少女はしばし沈黙し、答えた。その答えが答えといえるのならば。

「答えても、多分意味はない」
「えっ？　きゃっ！」

つばぜり合いの膠着状態は一瞬。
力を緩めてしまった隙に少女に押されてしまい、なのは再び地面に立つ。

黒い少女は反動を利用して後方の木の枝に舞い降りた。
そして互いのデバイスが形を変える。

『Device form』
『Shooting mode』

バルディッシュは鎌から長斧に。

レイジングハートは先端部を音叉状に展開した姿に。
杖の切っ先を互いに向け合い、彼女達は魔法を紡ぐ。

『Divine buster Stand by』
『Photon lancer Get set』

『なあああ……』

「っ!?!?」

一瞬、子猫に気を取られたなのはの視線が少女から外れた。
ほんの一瞬だが、それは致命的な隙。

そして少女はその一瞬の隙を見逃すほど愚かではなかった。

「……ごめんね」

少女の魔力量と腕前では必殺の一撃になりうる雷撃がなのはに向かつて放たれた。

金色の闇が視界を塞ぎ、遅れてくる衝撃。聞こえてきた少女の謝罪の声は何に対してか。

空中から落下する中、なのはが最後に感じたのは敗北感と少女の悲しげな瞳だった。

「なのはっ！ なのは！」

混濁した意識の中で、自分を呼ぶ声が聞こえた。

一番長く一緒にいて、大切ななのはの弟。

「はる……君……？」

「なのは！ 大丈夫！？」

目を開けると近くに春季の顔があった。それはもう目と鼻の先に。いつもなら恥ずかしくて、驚いて飛び上がるんだろぅなぁ、と、どこか他人事のように思いながら、なのははさすがのように顔を春季の胸に埋めた。

濡れたシャツは甘い香りと、仄かに汗の臭いがする。

きつと中々戻ってこないなのはを探して走ってきたのだろうが、今はそれすら気にならない。

『よかった、ハルキを呼んできて』

『ユーノ君が連れてきてくれたんだ……』

ユーノから届いた念話に安心するように返し、なのはは気になっていたことを聞いた。

『ジュエルシードは……あの子はどうしたの？』

『……ジュエルシードは、あの子が回収した』

『そっか……』

聞かなくてもわかっていた。

聞いたのはなのは自身が受け止めたかったただけだ。
黒い少女に負け、ジュエルシードを回収出来なかったことを。

「な、なのは？」

春季の驚く声をする。

中々話そうとしないなのはが気になっていいるのだろう。
きつと顔を心配そうにしながらも、真っ赤にしているはずだ。

なのはは答えない。

ほんの少しだけ。

様々な感情を受け止めるために、時間が欲しかった。

「なのは……」

ゆっくり回りされる春季の腕。

『これじゃあどっちがお姉さんかわからないなあ』と胸中で呟くが、
それすらも、この暖かさの前ではすぐに消えてしまう。

遠くからは恭也達の声が聞こえてくる中、優しい抱擁に包まれて、
なのははもう一度、瞳を閉じた。

第11話 子猫ともう一人の魔法少女？（後書き）

やっとこさ出来上がった、難産しまくりな11話でした。

さて次回の話にはあの子が登場します。

まだ無印なのに出してもいーんかいつて感じですが、このまま温泉に行くのも味気ないのでちょっとした話を挟みます。

第12話 病院と猫と迷子？

純白に彩られた清潔な出で立ちをしながらも、どこか圧迫を感じる壁。

鼻をつくのは様々な薬品などのあまり好きになれない独特の匂い。

ようするに、病院に春季はいた。

なのはが子猫を助けるために木から落ちた（事実はどうあれ、なのはが説明するには）日の翌日。

来週に控えた連休の旅行のこともあり、大丈夫と頑なに言い張るなのはを説得し、一応の検査をしに来たのだ。

本来なら春季は学校があつたのだが、近ごろ体調が優れないと咄嗟にいつて、なのはと桃子に同行していた。

咄嗟にとはいつたが、体調が悪いのは本当のことだ。

どうも倦怠感が酷く、早朝は特にそれが酷い。

なんともないとは思うのだが、なのはが心配なので近くにいたいと思つのもあるから、それでいいかと納得する。

「お大事にね」

「あ、ありがとうございます」

いつの間にか診察も終わつたらしい。

診察室から出ると、ふと喉の渴きを覚えた。

「結構時間かかったからなあ」

待合室を見るとまだ桃子となのはの姿はない。

まだ終わっていないようだ。

売店に行つてジュースを買つ暇くらいあるだろう。

滅多に病院にこなかつた健康優良児はよく知らない病院内を探検……
…もとい、歩くことにした。

そして三十分後。

「……」

春季少年は迷つていた。

完膚なきまでの迷子である。なぜかレントゲン室に行つたり、入院患者達が寝泊まりする病棟に迷い込んだりと色々悲惨だ。

それなりに大きな海鳴大学病院は、地理に疎い春季にとって未知の迷宮と変わらなかつた。

「……どうしよう」

携帯電話でなのは達と連絡を取つて迎えに来てもらつて？
却下。

病院で携帯電話を使うのはよろしくない。

このまま待つてなのは達を待つ？

却下。

一番確実に思えるが、迷子になつた挙げ句お迎えをしてもらつなんて少年のちつぽけなプライドが許さない。

ならば残るは……

「適当に歩くしかないか」

まあ、当然というか、そこに行き着いたが、些か疲れてきている。誰もいないがらんとした通路に備え付けられた長椅子に座り、春季

はため息をついた。

「あ、また幸せが」

「ため息つくと幸せが逃げてまうよ？」

先にいわれた。

声が出た方に視線を向けると、そこには女の子がいた。

茶色っぽい髪の毛が肩の辺りまであり、春らしい薄そつな長袖のシヤツにズボンを着て、車椅子に乗った女の子が。

とにもかくにもじつと見つめていても始まらない。

「えと、君は誰？」

「あ、あたし八神はやていいいます」

「八神さん、だね。僕は高町春季。よろしくね」

にこりと微笑みながら名乗ってくれたはやてに対し、春季も笑顔で返す。

「それで高町君、こないなところでため息ついたりしてどうしたん

？」

「うっ……」

正直にいうべきか、誤魔化すべきか。

ちっばけなプライドと正直に話して安寧を得るべきか、天秤が揺れ動く。

「売店に行きたかったんだけど……迷っちゃって」

所詮プライドなんてこんなものさ。

圧倒的な比重により正直に話した春季にはやてがくれたのは驚愕の

表情だった。

「売店つて……ここの真逆の方やで？」

「ま、真逆……」

方向音痴属性はなかったのに……と、驚きの真実に打ちひしがれる春季に、はやては手を振って苦笑した。

「この病院分かりにくいからなあ。よかつたら私が案内したげるよ？」

「えっ？」

捨てる神あれば拾う神あり。いや、別に捨てられてはいないのだが、はやての救いの手に一ま二もなくお願いする春季であった。

「はい、着いたで」

「わあ！ ありがとう、八神さん」

はやてに案内された春季だったが、散々歩き回った意味は何だったのかと少し前の自分を問い詰めたくなるほどあっさりと到着した。

「本当にありがとう。助かったよ」

「どういたしまして」

「あ、ちょっと待ってて」

そういつて売店へ早歩きで向かい、オレンジジュースとコーラの500mlペットボトルを二本購入する。

「オレンジジュースとコーラ、どっちが好き？」

「へ？ あ、それ私に？」

「もちろんだよ」

「そんな、道案内しただけやのに悪いわ」

「そんなことないよ。八神さんは僕を助けてくれた恩人だからね」

それにもう買っちゃったから、受け取って貰えると嬉しいな、と付け加えると、やがてはやても遠慮がちにいった。

「じゃ、じゃあ……オレンジジュースください」

「はい、どうぞ」

オレンジジュースのペットボトルを受けとると、はやてはぎこちなく微笑んでありがとうといった。

その笑顔を眺め、春季は残った方のコーラを飲む。

「あ、案内して貰っちゃったけど、八神さんも診察があったんじゃない？」

思い出した様に春季が聞くと、はやては朗らかに笑った。

「大丈夫だよ。まだ時間はあるしな」

「そっか、よかった」

自分のせいで診察に遅れる様では申し訳ない。

「それじゃ。道もわかったし八神さんの受診する所まで送るよ」

「送るって、そんな高町君に悪いわ」

「これも恩返しだよ」

遠慮するはやてに笑顔で返し、春季は車椅子の後ろに回る。

「高町君も案外強引やなあ」

「女の子には優しく、時には強引によって躡られましたから。それに、友達を送るのは変かな？」

「と、友達……？」

「あれ、嫌だった？」

努めて何気なくいったつもり友達の言葉。

はやては確認するようにその単語を口の中で反芻し、おそろおそろ口を開いた。

「私と高町君が友達？」

「ダメ、かな？ よかったら友達になってもらいたいんだけど……」

「う、ううん！ ダメなんかやないよ！」

不安そうな顔から一転、たちまち笑顔になり、はやては携帯電話をポケットから取り出した。

「じゃ、じゃあケータイのアドレスとかもええ？」

「もちろんだよ。でも、一回病院の外に出て交換しようか」

春季の提案に嬉しそうに頷き、はやての車椅子を押して春季達は病院の外に出た。

「これでごうして……っと」

病院から出た春季達は近くにあるベンチに座って携帯電話を弄っていた。

データの交換に対して便利な赤外線通信を用いてすぐさま互いの携帯電話にアドレスと電話番号を登録する。

「よし、登録完了。はい、八神さん」

「ありがとう！」

「こちらこそありがとう」

顔を見合わせて微笑み合い、はやては嬉しそうに携帯電話をポケットに仕舞った。

「それじゃあ高町君、私はこれから検査やから」

「そっか。じゃあ送っていくよ」

「ありがたいんやけど、一人で大丈夫だよ」

「え？」

「今は顔が真っ赤やから恥ずかしいんよ」

いわれて見たらはやての顔はトマトみたいに赤く染まっていた。そういう事なら強引にしては悪いかかと判断し、春季も頷く。

「わかった」

「高町君と話せて楽しかったわ」

「よかった。またいつでも連絡してね？」

「うん！ それじゃあ、またな？」

「またね、八神さん」

手を振りながら病院内に戻っていくはやてを見えなくなるまで手を振り返し、春季はベンチに座り直した。

「八神はやてさん、か」

友達になれた女の子。

最近はその女の子の友達がよく増える。

春季には同年代の女の子の友達がいるし、彼女達をはやてやフェイトに紹介して仲良くなってもらえればきっと、もっと楽しくなりそうだ。

「さて、僕もなのは達の所に」

戻ろうかな。という言葉は続かなかった。春季の視線の先には猫。それも二匹もだ。

「……」

ゆっくりと、猫が怯えないように近付く。

実は春季は猫が大好きなのだ。

この間の月村家に赴いた際に美由希の愛情による腹痛で猫と戯れることが出来なかったことは今でも無念に思っていた。だからこそ今の状況はもうマジシンボウタマランといった所だろう。

「おいでー」

寝そべりながらこちらを眺める猫達に視線を合わせるためにしゃがみこみ、春季は手を差し出す。

「……」
「……」

何かを確認するように二匹の猫は顔を合わせ、しばしの沈黙。

「……首輪もないし野良猫かな」

逃げもしないでそのままの体勢でいる猫達。
やがて一匹がゆっくりと春季の手に近付き……指を舐めた。

「！」

わかっていただけだろうか。警戒心が強いはずの野良猫が見ず知らずの自分の指を舐めた。

なんだか認められたような気分になって高揚してしまう春季の気持ち。

「可愛いなあ」

すりよってきた猫の頭をそっと撫でるとたちまち破顔してしまう。

「……」

なんだかもう一匹は呆れたように春季と春季に撫でまわされる猫を見ている気がするが、それは気にしない。

「ああ、売店で食べ物を買っとくんだった」

春季の手は止まらない。

ユーノがいる家ではさすがに猫は飼えない。

なぜかユーノは高町家の女性陣にばかりなつくので一緒に遊べないのが残念だ。

その鬱憤をはらすかのように、猫との戯れは検査が終わって春季を探しに来たなのは達が来るまで続いた。

因みになのはは疲労が溜まっている他には特に異常は無かったとか。

「ああ、驚いた」

名残惜しそうに何度もこちらを振り返っていた少年が見えなくなると『猫』は思わず呟いた。

「……………不覚だわ」

「珍しいね、アリアがお父様以外に頭を撫でさせるなんて」

アリアと呼ばれた猫はそっぽ向きながら言葉を返す。

「あの男の子……………不思議な感じがしなかった？」

「んー、私は特に感じなかったよ。それより女の子の魔力が気になるったし」

「そうね、女の子の魔力はかなりの物。……………気のせいだといいんだけど」

「……………ロツテにいわれるなんて。本当に不覚だわ」

普通の人がいたらたまげる状況の中、猫達はまた寝そべって病院の出入口を見つめた。

「彼が持っているはずの魔力……………どうして借り物めいた違和感があったのかしら」

アリアの呟きは誰の耳にも届かぬまま、春のそよ風に溶けて消えていった。

第12話 病院と猫と迷子？（後書き）

なぜか間違えて削除してしまいました……

急いで投稿しましたが、ご迷惑をおかけしましたm（|）m

第13話 友達

「……ないなあ」

海鳴の商店街の地面を注意深く観察しながら練り歩いていた春季は少々の疲労を含んで呟いた。

春季がこうして放課後の空いた時間に海鳴を歩き回っているのは、もちろんジュエルシード探索の為だ。

もうすぐ家族や親しい人達との温泉旅行もある事だし、なんとか見付けたかったのだが成果はない。

それ以前にジュエルシードを探索するフェイト達に頼まれている訳でもないのに、ここまで自分の時間を費やしているのはなぜだろう？
春季は自問しようとして 考えるまでもなかったと思考を止めて
答えを出す。

理由は簡単。

フェイトとお姉さんに助けられたので、その恩を返したいから。

うん、何一つ文句の付けようがない理由だ。

心の中で自分の行動を正当化する答えに満足しつつ、春季は探索を続けた。

少年の心の深い深い所で根付いていた想いの欠片と本当の理由には幼さゆえに気付かぬまま。

「ぐー……」

いつの間にやら夕方になっていた。歩き疲れてたまたま見掛けた公園のベンチにだらしなく腰をかけ、春季は溜まりに溜まった疲れを呻き声に変えて吐き出した。

「そろそろ帰らないとなあ……」

疲れてはいるのだが、すっかり夕日に染まった街並みを見るに門限は間もなくだろう。

この間の魔法との邂逅での一件により、門限に関しては割りと緩かった家族にあまり遅くならないようにと釘を刺されてしまったのだ。もちろん春季もこれを無視して外にいるというのは心苦しい。

「よいしょっと……」

「ハルキ？」

疲労を堪えつつ立ち上がり帰路に着こうとして、春季の背後から声が聞こえた。

誰か？ と問うまでもない。

振り返った春季の視線に写るのはフェンス越しにこちらを見つめるフェイトだった。

白いミニスカートに袖口に軽くフリルがあしらわれた黒いシャツと、年相応の可愛らしい格好をしているフェイトが戦う魔法少女だなんて誰も想像出来まい。

夕日を反射してキラキラ輝く金色の髪に目を奪われながら、春季は人として大切な行為を行う。

「こんにちは、フェイト」「こ、こんにちは」

大切な行為　挨拶　をするときこちなくだが、しっかりと返してくれた。

きよろきよろとフェイトは顔を動かし、やがて見付けた公園の出入口へと移動する。

そして近付いてくるなりフェイトは疑問を口にした。

「今日は魔力が安定してる……」
「どうしたの？」

小声で呟かれたフェイトの言葉は春季の耳には届かなかった。

「なんでもないよ。それより、こんな所でどうしたの？」

「えーと、散歩中……かな？」

「そうなんだ。お散歩してたんだね」

言葉を濁した春季にフェイトは少し楽しそうに納得した素振りを見せた。

(これはバレてるよね……)

冷や汗をかきながらも、とりあえず話を変える。

「フェイトはどうしたの？」

「私？　私はハルキと一緒にだよ」

散歩中かー、なるほどなーとか安易な現実逃避に逃げ込むという魅力的な誘惑を振り切り、春季はフェイトの手に提げられたビニール袋を見た。

正確にはビニール袋から覗く黄色い箱を。

「あの、フェイト。それって」
「これ？ うん、今お店で買ってきたんだ」

箱の正体はドッグフードだ。

原則的にペット禁制であり、ペット用品など無縁な高町家の春季がなぜドッグフードの箱を知っているかというところ、すずかの家をねこ天国と評したアリサの家は犬天国だからだ。

何度かなのはと一緒に遊びに行く内に、バニングス家でアリサ付き執事さんの鮫島さんが黄色い箱のドッグフードを与えているのを何度も見て覚えていたからだ。

ちなみに春季は基本的に動物が大好きなのだが、犬だけは子犬だろうと苦手だったりする。

「ドッグフードを買うって事は犬でも飼ってるの？」

犬を飼っているのならバニングスさんと話が合いそうだなと考えていた春季に、フェイトは思いもよらない事をいった。

「アルフのごはんなんだ」

「……え？」

時が止まり、春季の表情も固まる。

黄色い箱「ドッグフード」アルフさんのごはん？

いや、落ち着け高町春季。

確かにアルフさんには犬っぽい耳と尻尾は付いていた。

だけど、あれはきつと魔法使いのファッションだとか流行だったりするのだろうか。

そして今のフェイトの言葉はフェイトなりの冗談で、自分をからかっているだけなのだ。

よし、ならば自分はそれにのらなければならぬ。

「へ、へえー。ドッグフードを食べるなんてアルフさん、犬みたいだね」

さあ、どうでる!？

「? アルフは犬じゃないよ?」

「うん、知って」

「アルフは狼だよ」

フェイトの言葉にホッとしながら同意しようとした春季に、またもや思いもよらない答えが彼の言葉に被さった。

あの娘はなんていった?

「おおかみ? でもあるふさんはにんげん?」

「あれっ、いつてなかったっけ?」

呆然とする春季に慌ててフェイトがアルフの事と、使い魔について説明するのだが、自失呆然とした春季がちゃんと理解したかはわからなかった。

「えーと……つまりアルフさんは人の姿になれる狼で、フェイトに助けられて使い魔になった」

「……うん。人になれるようになったのは使い魔になったからだけ

ど」

なんとか現実に戻ってきた春季は、なんとかフェイトの説明を若干ながら理解した。

使い魔はよくわからなかったが、魔導師のパートナーみたいな物らしい。

「ごめんね。ちょっと……いや、かなりか。驚いちゃって」

「ううん、知ってると思って説明しなかった私達も悪いから」

フェイトはごめんなさいと最後に付け加えた。

「フェイトとアルフさんが謝る事じゃないよ」

いつている内に気付いたが、夕日は沈みかけて辺りは大分暗くなっていた。

「そろそろ帰らないとね」

「あ、アルフも待ってるんだった」

さて、それじゃあ帰ろうかとした所で、春季の脳裏に母親と大きな方の姉の顔と声が浮かんだ。

『女の子には優しくね?』

『とにかく気を配る事。今は暗い……わかるよね?』

親子から教育された女の子への接し方は、すでに呪いと呼べるほどだ。

春季の行動がよろしくない時には必ず、優しくも背筋が凍るほどのプレッシャーを放つ笑顔が浮かぶのだ。

だが、今の『呪い』は春季にも正論の様に思えた。いくらフェイトが魔法使いでも、もしもの事もありうるし、仮に起こってからでは遅い。

「ハルキ、どうしたの？」

動きが再び止まった春季にフェイトが問いかけた。

「っと、その……」

母と姉の声と自分の意志が選んだ行動。

それをする為にはフェイトの同意も必要で、言葉にして伝えなければならぬ。

しかしながらだ。

普段はアリサ達と一緒に登下校をしているが、春季も一応羞恥心はあるのだ。

幸いにも彼らが通う学校の子供達はそういった事に過敏な反応はするものの、いじめに発展する事はない。

そして、何気なく女の子と共にいられるのは、姉のなのはもその場にいるからというのものもある。

すでに慣れきってしまったアリサやすずかは別だが、女の子と二人つきりという状況が春季にとってはどうも慣れなかった。

まあ、初対面時には外国人から話しかけられて互いにテンパっていた事もあり、逆にリラックスして話せた。

それ以降もアルフは違うが、はやての場合は羞恥心より迷子による焦りと不安が勝っていたからだ。

この様に状況を確認してみると、春季は平常時より異常な事態に陥ってしまった方が異性でも普通に話せる事がよくわかった。

でも今は自分の意志だけで（呪いは別にして）女の子と二人つきりになる選択をしようとしている。

「ハルキ？」

ダメだ。

フェイトも心配そうに自分を見ている。

覚悟を決める。

いうんだっ！

「あのさ、フェイト」

「なに？」

「暗くなってきたし、家まで送るよ」

家まで送る。

春季がその言葉をいうまでであった内心の葛藤など知るはずもないフェイトが感じたのは、少しの困惑とよくわからない喜びだった。

「えっと、ここからならそんなに距離もないし、大丈夫だよ？」

「へ？ そうなの？」

春季は知らなかった事だが、ジュエルシードを探索している内に海鳴市とフェイトとアルフが仮の住まいを置いている遠見市の境界線

近くまで来ていたのだ。

ポカンとした表情を晒す春季に、フェイトは続ける。

「うん。それに私、強いから平気だよ」

「そっか、わかったよ」

どうやらわかってくれた様だ。

またもや漠然とした寂しさが胸に宿るが、フェイトはそれを振り切る様に別れを告げようとした。

「じゃあ、せつかくだから途中まで一緒に帰る？」

「え？」

今度はフェイトが呆ける番だった。

納得した様に見せかけて、春季は『せつかくだから』と『一緒に帰ろう』といった。

せつかくだからってなにがせつかくなの？

一緒に帰ろうってなんで？

元々、他人との関わりが薄い少女だ。

春季と同じくフェイトもまた、こういった経験はない。

フェイトが固まっているのを見つめていた春季が右の頬をポリポリとかきながら、残念そうに苦笑する。

「えーっと……嫌、かな？」

「嫌じゃないけど……どうして？」

「え？」

さっきから答えては聞き返しての繰り返しだなあ。

微かに残っていたフェイトの冷静な部分がこれじゃあ最初に会った時みたいだと感じた。

「どうしてハルキは私に構うの？」

考えてみたら、春季とフェイトはまだ三回しか会った事がない。

たまたま念話で話したりはしたが、それもジュエルシードや魔法関係の事ばかりだ。

わからない。

なぜハルキは自分と帰ろうとするのだろうか？

わからない。

なぜ魔力が増えたり減っていたりと不安定なのに、危険なジュエルシード探索に協力してくれるのだろうか？

わからない。

なぜハルキはあの時『またね』といい、自分も『またね』と返したんだろう？

わからない事だらけのフェイトは、次に言葉を紡ぐはずの春季を緊張した面持ちで待つ事しか出来ない。

そうしたフェイトとは反対に春季は、今度はあっさりと返答した。

「どうしてって、友達だからじゃないかな」

「ともだち……？」

初めての言葉だった。

いや、正確には母から地球へ向かう様にいわれて勉強した日本語の辞書に書かれていたのは見た。

その時は勉強と速く母の役に立つ為に気にも止めなかった単語。

意味を知りながらも、自分には無関係だと思っていた。

アルフは使い魔だが、もはや家族といってもいい存在だし、母親はいわずもがな。

今はいない母の使い魔、山猫のリニスだって時には教師であり、時には保護者のような立ち位置で、友達ではなかった。

「ご、ごめん！ 泣くほど嫌だったなんて思わなかったからっ！」

「え？ あれ、私……泣いてる？」

慌てた春季の言葉に、フェイトは自分の目の近くに触れて気が付いた。

なぜ自分は泣いているのか？

それはとても気になったが、慌てふためく春季を見て今はいいかと思ひ直す。

次第にしょんぼりしていく『友達』に返事をしないと。

涙を拭い、とてもぎこちないだろうなと自覚した笑顔を浮かべながら、フェイトは伝える。

「一緒に帰る？ ハルキ」

「あ……うん！」

さっきまでとは違う満面の笑みを浮かべる春季と歩き出し、フェイトは心の中でここにはいない母親に向けて呟いた。

母さん、私に友達が出来ました。

第13話 友達（後書き）

お待たせして申し訳ありませんm（――）m

やたら執筆に時間がかかった13話でした。

第14話 温泉旅行と御神流？

日本全国では連休が幕開けしていた。喫茶翠屋は年中無休だが、こういった連休では店をアルバイト達に任せている。

高町家、月村家、アリサと三組の人々は温泉にでも行って疲れを癒そうというプランを練っており、今やお馴染みとなったちよつとした旅行だ。

移動手段の自動車は二台用意され、それぞれ一台目に運転手として士郎、助手席に桃子。

二列目の座席には美由希と春季、三列目には左からなのは、アリサ、すずかが乗っている。

前列では夫婦のイチチャイチャトーク、最後列では女の子同士で盛り上がっているようだ。

一方、二台目には運転手の恭也、助手席に忍、後部座席には月村家のメイドさん、ノエルとファリンが乗っていた。

ユーノが美由希の肩の上からなのはを見詰めているのを微笑みながら眺め、春季は最近出来た友達へのお土産を考える。

友達というのはもちろん、フェイトとアルフにはやてである。

ジュエルシード探索を放課後に続ける傍ら、春季は定期的にフェイトとは念話、はやてとはメールや電話で連絡を取り合っている。

特にフェイトはこの間の出来事によって話す話題の種類、時間が増えてきていた。

彼女達は一日中ジュエルシード探索をしているが、ちよつとした休憩時にも念話を送ってくるのだからあの出来事も無駄じゃなかったと思える。

それはさておき。

新たに出来た友達を皆に紹介したかったのだが、何かと忙しそうにしている人には残念ながら紹介出来そうにない。

しかし来週の休日にアリサとすずかには紹介出来そうだ。

ただフェイトからは時間がないから……と残念そうに断られてしまった。

仕方ないと思う一方で、残念な気持ちもするが、これ以上は春季のワガママであろう。

だからこそ、今回の温泉旅行ではいいお土産を渡したいと思っていた。

（あれ？ ……女の子にお土産って何をあげたらいいんだろ）

女の子がペナントとか温泉まんじゅうを貰って嬉しいだろうか？

しかし温泉宿で買うお土産なんて他に思い付かない。

いきなりの壁に腕を組ながら、うーんと唸る。

「春季、どうしたの？」

「え？」

どうやら百面相を隣に座る美由希に見られたようだ。

「な、なんでもないよ」

「春季のなんでもないは何かある、だからなあ」

美由希に笑いながら頬をつつかれ、たははと苦笑する。なんだかんだいって春季は兄や姉達には弱いのだ。

末っ子ということから兄からは厳しく、姉達からは優しくされているのは飴と鞭の上手な使い方なのかもしれない。

「友達にあげるお土産をね。どんなのが嬉しいのかなって」

「ああ、お土産かあ。それはもしかして……女の子？」

「そうだけど……よくわかったね」

「あはは、私は春季のお姉ちゃんだからね」

お姉ちゃんなら仕方ない。

とばかりに頷き、春季は意外と頼りになる長女に助言を求めた。

「お姉ちゃんは何がいいと思う？」

「うーん……旅行に付き物のペナントとか！」

いたよおい。

「や、やっぱり自分で決めるよ」

「そっか。女の子へのプレゼントなんだからしっかりね」

ペナントって真っ先に仰ったあなたが申すか。

頑張るよと若干頬を引き付けながら答え、春季は窓越しに流れる景色に視線を向けたのだった。

『お姉ちゃん』という言葉には敏感なのはがなんの反応も示さなかった事に疑問を感じながら。

「うわあ！ きれー！」

温泉宿に着いた一行。

大人組は荷物を運び、子供組は中庭に出ていた。

庭の片隅にある池には鯉が泳ぎ、そびえる木々の一本一本が風流な雰囲気演じている。

広く綺麗な庭は女の子達の心を捕らえて離さない。
アリサの歓声になのはとすずかも加わり、たちまち静かな庭は華やかな風景へと変貌した。

外観だけでなく内部まできちんと清掃が行き届いた旅館を見ると、まだ見ぬ温泉への期待が膨らんでいく。

アリサが子供組唯一の男である春季に声を掛けようとして、そこで気付く。

「ハルは？」

広い庭にいるのはアリサ、なのは、すずか、そしてなのはの肩に乗るユーノだけだった。

「あれ？ いないね、はる君」

「はるき君なら荷物運びを手伝ってたよ」

浮かれすぎていたアリサと自分の思考に没頭していたなのはにすずかが答えた。

「もぉー、ハルったらこんな時にも真面目なんだから」

「にやはは、真面目なのははる君のいい所だよ」

「そうだね」

「べ、別に私だって悪いっていつてる訳じゃ……」

「あ、アリサちゃん、真っ赤になってる」

「い、いいから！ もう温泉に来たんだから温泉行くわよっ！」

珍しくからかわれる側になり真っ赤になったアリサが小走りで行ってしまい、残された二人は顔を見合わせて苦笑した。

「へっ……くしゅ！」

「春季、大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

女の子達の話題になっていた事など知らずに、荷物運びを終えた春季は恭也、ノエル、ファリンと一緒の部屋で寛いでいた。

ちなみに高町家のラブラブカップルは荷物運びも早々に二人きりでどこかに行ってしまった、ここにはいない美由希と忍はなのは達を探して温泉に入る様だ。

子供用の浴衣に身を包んだ春季がティッシュで鼻を拭き終わると、メイド長のノエルが恭也と春季にお茶を差し出す。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「ありがとうございます、ノエルさん」

くしゃみは寒いからかな？ 別に寒くないけど。

とりあえず温かいお茶で体を暖める事にして、不意に恭也と話していたノエルの顔が春季を見た。

「えと、僕の顔に何か付いてますか？」

なんともベタな質問だが、ノエルほどの美人に見つめ続けられて心の平穏が保てるはずがない。

微かに顔を赤くする春季に微笑みながら、それを否定する。

「いえ。ただ、こうして恭也様とお並びになると、とてもよく似ておられますね」

「そ、そうですね？」

「ふむ。春季は昔からなのはより俺に似ているといわれているからな」

「そうですねえ、恭也様をそのまま小さくしたって感じですよ」

いつものまにやらファリンまで会話に加わり、三人の六対の瞳が春季を見つめた。

「そんなに見ないでくださいよ、恥ずかしいですから」

今度こそ真つ赤に染まった春季にそれぞれが満足そうな顔をしつつ、三人は彼の顔から視線を外した。

そして、この中では一番お喋りなファリンの質問で、和やかな空間が一変する事になる。

「そういえば、春季君は恭也様達のように剣術はされないんですか？」

純粋な興味からだっただろう。

だが、その質問に恭也の和やかな表情が消え、そして春季の表情も能面に似た無表情になる。

「いい所だな」

「ええ」

アリスがからかわれている頃、いつもは穏やかな春季の表情が消えた頃。

一家の大黒柱とそれを支える妻は旅館の近くの遊歩道を歩いていた。実年齢より若くみられがちなこの夫婦が並んで歩くと、新婚の様にも見える。

「ここまで、長かったな」

「そうね。子供達も大きくなったし、お店も若い子達に任せられる様になった……あの頃とは随分変わったわ」

「すまなかつたな、桃子。でも、もう危ない事は無いさ。俺はずっと翠屋のマスターだよ」

「アナタ……」

桃子が体を預けてくるのをしっかり受けとめ、土郎は心の中で誓う。

そうだ。

四人の子供達それぞれの孫を抱くまでは、いや、それからもずっと元気でいないと。

恭也には恋人の忍がいるし、美由希になのはに春季だってやがて愛する人と出会い、結婚していく。

少し……違うな。

かなり寂しいが、その時は笑って見送ろう。

翠屋の後継ぎだって、そういった事には疎い兄達だったが、なのはと春季は桃子から受け継いだ才能もあるし、春季はその道を視野に入れて努力している。

ある事が気掛かりだが、それも大人になれば春季もわかってくれるに違いない。

未来に思いを馳せつつ、土郎は隣にいる最愛の人の手をぎゅっと握った。

「やりません」

春季の答えは簡潔だった。

「そ、そうですか」

空気を読んだファリンもそれだけ返し、部屋は重い空気に包まれる。やがてお茶を飲み干し、ご馳走様とだけいって春季が部屋を出ていくと、ファリンは大きな瞳を涙で潤ませつつ、恭也にすぎるように聞いた。

「恭也さまああ、私は春季君に失礼な事を……」

「いや……ファリンは気にしなくていい。あれは俺達、御神流と春季の問題だ」

それだけいって恭也もまた立ち上がる。

「どちらへ？」

ノエルの質問に、微笑みながら恭也は答えた。

「風呂に入ってくるよ」

「……行ってらっしゃいませ」

「ああ、いつてくる」

着替えを持った恭也を見送ると、ノエルは珍しくため息をついた。

「お姉さまああー」

今度は彼女の足を掴んで本格的に泣き出したファリンをあやしなから、ノエルは主人の恋人とその弟にエールを贈るのだった。

かぼーん。

お風呂ではお馴染みの擬音だ。

隣の女湯からはなのはやアリサ達が楽しそうにはしゃぐ声が聞こえてくる。

男湯とはいえば、身体を擦る恭也と頭を洗う春季が並んで座っていた。

互いに無言で、更に男湯には他の客もいない。

そんな女湯とは違って静かな男湯で、恭也は隣で頭を洗っている春季を見やりながら、どう話を切り出した物かと考えていた。

考えに考えている内に、春季はお湯がたつぷり入った桶で頭の泡を流していく。

それを数度繰り返すと、顔をお湯で洗った春季はポツリと呟いた。

「……………ごめんなさい」

重い空気の中で先に弟に話させてしまった己を恥ながらも、恭也はその言葉の意味を確認しなければならぬ。

「それは何に対しての謝罪だ？」

「……………せっかくの旅行なのに僕が楽しい雰囲気壊しちゃったから」

「俺は気にしてないさ。謝るなら何も知らなかったファリンに対してだな」

「そうだね」

そういつて頷き、恭也は一番気になっている事を春季に聞こうと口を開けた。

「なあ、春季。お前はやはり御神流が……」

その先はいえなかった。

言葉が続かなかったのもあるが、質問を連想した春季がすぐに答え
たからだ。

「うん。……僕は」

「御神流が嫌いだ」

第15話 意外な遭遇？

御神流が嫌いだ。

春季が告げた言葉に恭也はそうか。とだけ返した。
その反応に春季は嘆息する。

「理由、聞かないの？」

「話すのか？」

「僕としては聞かないとわからない事の方が……」

言葉を止める。

ここまでいっておいで今さらだが、温泉旅行に来てまでいう事じゃない。

もう一度ごめんとだけ呟いて、春季は結局浸かることのなかった温泉を後にした。

「……くそっ」

再び浴衣に身を包んだ春季は気持ちの整理がつかないまま、旅館内を歩いていった。

このまま恭也に会ってしまえば言葉が止められそうになかった。
御神流が嫌いとはいつたが、その訓練をしている父、兄、姉まで嫌っている訳ではない。

むしろ家族が好きだからこそ、嫌悪の矛先を御神流に向けるしかないのだ。

幼かった春季となのはを孤独にした原因である御神流に。
だからこそ、高町春季は剣を、御神流を学ぶことも好きになること

も絶対はない。

「くそっ」

もう一度毒づき、春季は不安定な心をなんとか静めようとする。
こんな時はなのはの側にいると落ち着けたのだが、彼女は温泉に入っていたからまだ出てこないだろう。

「って、僕は何を考えてるんだ」

あの姉はこちらから適度に距離を取らないと必要以上に春季の事を気にする。

決めたはずだろ？ 高町春季。

なのはに頼りすぎない様に、重荷にならない様にしよう。

溢れそうになる激情を堪えながら歩き続けていると、何やら見知った姿を見付けた。

「あのオレンジ色の髪はアルフさん？」

春季の視線の先にいるのは、どこか満足そうな表情で浴衣を着るアルフだった。

「おー？ ハルキじゃないか。こんな所で何してんだい？」

いつも通り といっても会うのは二回目だが の勝ち気な笑顔をしたアルフを見て、春季は先ほどまでの事をとりあえずは心の奥に仕舞った。

「こんにちは、アルフさん。僕は……家族や親しい人達と旅行に来

てたんです」

「へえー」

家族といおうとして僅かに詰まった春季には気が付かない様子で、アルフは間延びした相槌を打った。

「アルフさんはなんでここに？」

「この辺でジュエルシードの反応を見付けてねえ」

「こんな所にですかっ!？」

ジュエルシードが海鳴温泉近辺にあると聞いて大声をあげてしまった春季の耳元で、アルフは静かにしておくれよと囁いた。

思わぬ事態に大声を出してしまったが、ジュエルシードのことは秘密だったと思い出し、頭を下げる。

「…………すみません」

「今からは念話に切り替えるよ」

「あ、わかりました」

頭に響く、すっかり慣れてしまった念話に意識を切り替え、春季は話の続きを待った。

「実をいうとね、マズイ事にアタシら以外にも魔導師がいたんだ」

「魔導師が?」

それだけ聞いても何がマズイのかなんでわからない。

「そうさ。初めてアタシがハルキと会った時にフェイトが気付いたんだよ。それでついこの間、実際にフェイトがやりあったんだけどね」

『やりあったって、フェイトは大丈夫なんですか!?!』
『何いってんだい? フェイトとは一昨日会ったんだろ?』

いわれてみればそうだった。

昨日だって念話したし……と考えて、春季はいつだったかフェイトの念話に違和感を感じた日を思い出す。

あれは確か春季達がすずかの家に遊びに行った日の夜だ。

いつになく饒舌だったフェイトに、その時は気にも止めなかったが、もしかするとその日に戦ったのかもしれない。

『それに相手はてんでよわっちかったから、フェイトの敵じゃないさ』

『そう、ですか』

魔導師とやりあったという事は戦ったのだらう。

あの春季がフェイトとアルフに助けられた日の様に、決定的に違うのは人が相手だったという事。

戦いという言葉が春季は嫌いだ。

御神流を連想してしまう言葉自体が嫌いと言い換えてもいい。

『ハルキ? 続けていいかい?』

『あ、ごめんなさい。お願いします』

訝しげなアルフの念話に、春季は思考を打ち切った。

『まあ魔導師の事はどうでもいいや。とにかく、今夜は部屋から出るんじゃないよ?』

『……危険だからですよね』

『そうさ。夜にでもなればフェイトが細かい場所の特定も出来るだろうしねえ』

本能的に反論しようとして、理性が押し止める。

もし戦いがあれば念話しか使えない自分の様な足手まといがいたら、フェイト達は動きにくくなるだろう。

心配した所で着いていっても、逆にピンチに陥ってしまったては悔やんでも悔やみきれない。

高町春季は 春季だけでなくのはもだが 他人に迷惑をかける事を一番忌避していた。

ちなみにこの事だけに関して、春季にとっての他人はなのは以外の人間全員であり、なのはは春季以外の全員である。

別に迷惑を掛け合いたい訳ではない。

ただ単に自分達が正直でいられるのがなのはであり、春季であるというそれだけの話だ。

『わかりました』

『おや、物分かりがいいじゃないか』

『フェイトやアルフさんに迷惑をかけたくありませんからね』

『ふうん。それじゃ、アタシは行くよ』

『はい』

春季の返答に意外そうな表情をしたが、それもすぐに興味を失ったのか、アルフは歩き出した。

が、すぐに足を止める。

「いい忘れたんだけどね」

唐突な肉声に、慌てて念話から普通の会話に切り替える。

「なんですか？」

「ありがとうね」

「……？ 何がですか？」

アルフさんにお礼をいわれる様な事をしただろうか。

「わからないなら、その方がいいんだろうねえ」

結局、何がいいたいのかはわからずに、アルフは今度こそ歩き去った。

「うーん。白い魔導師に忠告しにきただけなのに、なんか得しちゃったねえ」

人通りの無い廊下を歩く美女　アルフはご機嫌そうに偶然会った春季と、最後にいった事を思い浮かべた。

『フェイトと友達になってくれてありがとうね』

色々と言葉を付け足したらこんな所か。

一昨日、マンションでお腹を空かせて待つフェイトは帰ってくるなり嬉しそうにいったのだ。

『私に友達が出来たよ』

はにかみながらも嬉しそうにいうフェイトを見て、アルフがどれだ

け嬉しかった事か。

お腹を空かせながらも、使い魔と主人は魔力以外にも感情のリンクによって繋がっており、主人が悲しいと自分も悲しく、主人が嬉しいと自分も嬉しくなるのだ。

きつとあの少年はわかっていないだろう。

アルフに伝わるほど喜んでいるフェイトの気持ちか。

まあ、それならそれでもいい。

なんとなく、その方が自然な気がしたから。

「っと。あの娘かい」

目標を確認した途端、アルフのまったりとした空気は霧散する。

あるのは狼の如き獰猛な瞳。

運がよかったね、白い魔導師。

今のアタシは気分がいい。

忠告に頷かなかったとしても、この場でガブリは勘弁してやるう。

だが、忠告を無視してフェイトの邪魔をするのなら……知った事ではない。

犬歯が覗くほどの獰猛な笑みを浮かべながら、アルフは仲が良さそうに歩いている三人の娘達に近寄っていった。

「はぁーい、お嬢ちゃん達」

温泉から出た恭也は先ほど話していた事について考えていた。

温厚で押しに弱すぎるくらいがある春季が、何かを明確に『嫌い』と表現するのは珍しい。

恭也が知る限りでは初めて聞いた言葉ともいえた。

そういえば最近、いつもべつたりな春季となのはが一緒にいる事が少なかったり、二人が別々に外出する事が多くなった。

これはまあ、それぞれに付き合いという物もあるし、春季は姉離れしようとして中々出来ないでいるのでわからなくもない。

ただ、なのはは昔からこちらからしても不安になるほど春季に付きつきりだった。

たまの喧嘩はあったにしろ、それでもすぐ仲直りして仲良く遊んでいた。

兄弟喧嘩とは無縁な高町家において、それはいい事なのだろう。むしろ喧嘩中に感情を剥き出しにして言い合う時だけは、九歳児らしからぬ落ち着いた雰囲気の子が年相応に見えた。

そんな春季が初めて恭也に対して怒りの感情をぶつけた。

それが御神流への怒りだったにしろ、怒りという感情を表に出した事すら春季は恥じている様だった。

精神的に不安定になっているのだろうか。

なのははなのはで早朝から出掛けては、本人は隠している様だが酷く疲労して帰宅し、そんな日は必ず春季も寝起きにも関わらず疲れの色が濃く見えた。

「父さん達と話し合うべきだな……」

自分だけで考えていても埒があかない。

とりあえずは旅行が終わってからだと決め、恭也は客室へと戻った。

「ああ！ イライラするう！」

「お、落ち着いて、アリサちゃん」

温泉で汗を流したなのは達と天国と地獄を味わったユーノが談笑していた時（もちろんユーノは話してはいない）だった。

オレンジ色で髪の高い美女がフレンドリーに話しかけてきたのだ。

しかし話す内容はフレンドリーとはいえない、アリサとすずかにとつては意味不明な物だった。

勘違いといって去っていったのだが、せつかくの旅行の気分を台無しにされたのだから堪ったものではない。

それを思い出しては怒るアリサすずかが諫めるがそれもあまり効果はないようだ。

なのはも女性からの口撃の矢面に晒されたことを気にしているのか元気がない。

「あつ、はるき君」

どうしたもののやらと一人悩んでいたすずかが廊下の脇に横路を見た。その視線と指の先には、なにやら不機嫌そうに佇む春季がいる。

（不機嫌そう……？）

初めて見る春季の表情に思わず首を傾げるが、なのはとアリサは気付かずに遊技場に行ってしまう。

わずかに逡巡し、すずかは春季の方へと足を進めた。

春季の感情は今までにないほど不安定だった。

心の奥に閉じ込めていた御神流への嫌悪。

そして恩人であり、友達でもあるフェイトに対して何の助けも出来ない無力感。

(いけない……表情に出ちゃってるな、これ)

苛立ちがそのまま表情に現れているのを自覚し、自制する。昔から表情を作るのは得意だった。今回も同じように作るだけだ。

「はるき君」

不意に掛けられた柔らかい声。表情を作り直し、ゆっくりと顔を向けた。

そこには湯上がりだから頬を上気させ、髪をわずかに湿らせたすずかの姿。

普段は見ない浴衣も可愛らしさを惹き立てており、よく似合っている。

「月村さん？ どうしたの、こんな所で」

「なのはちゃん達と遊技場に行ってたなら、はるき君を見付けたの」

なるほど。と頷き、次にはて？と首を傾げる。

「なのは達は？」

「温泉から出たら嫌なことがあってね。なのはちゃんもアリサちゃんもそれを気にしちゃってて気付かなかったみたい」

「嫌なこと、って誰かになにかされた？」

「ううん。知らない女の人に声をかけられたただけだから」

知らない女の人……そういわれて、なぜか春季の脳裏にはアルフの顔が浮かんだ。

(いや、ないない)

第一、アルフがなのは達に声をかける理由も嫌がらせをする理由もないだろう。

頭を振って変な想像を振り払う。

「あの、はるき君。大丈夫？」

「なにが？」

「……私のはるき君を見つけた時、怖い顔してたから」

どうやら春季の表情が見られていたらしい。

大丈夫、笑顔は作れているはずだ。心配をかけちゃいけない。

「大丈夫だよ。ただ、お土産をなににしようか迷ってたただけだから」

「そっか。何も無いならいいんだ」

「うん、心配してくれてありがとう」

すずかの笑顔に内心でありがたく思いつつもほっと息をつき、春季は話題を変える。

「所で、ファリンさんがどこにいるか知らないかな？」

まずはファリンに謝らなくてはならない。

楽しい旅行なのに自分のせいで気を悪くしたはずだ。

「ファリン？ たぶん……お部屋かなあ」

「わかった。ありがとう、月村さん」

頭を下げ、そのまま走ろうとして

止める。

走ったら他の人の迷惑になるからだ。

心なしか足早に、ファリンがいるであろう客室へと向かう。

「行っちゃった」

春季が去り、残されたすずかは苦笑しながら、改めてなのは達の所へと足を運んだ。

ちなみに春季が客室へと戻るとファリンとノエルはたしかにいた。

突然戻ってきた春季に二人とも驚いてはいたものの、春季の開口一番の謝罪にファリンは瞳を潤ませながら……というよりも泣きながら『こちらこそごめんなさい』というのだった。

その際、感情が暴走したファリンに抱きつかれ顔を赤く染めながら慌てる春季と、それを微笑ましく見守るノエルがいたのだが……それは完全に余談である。

さらにタイミングの悪いことに、春季を呼びに来たなのは達にその

光景を見られて半泣きになりながら弁解していた春季の姿があったのも、これまた余談である。

第15話 意外な遭遇？（後書き）

まずは読者の皆さまに申し訳ありませんでした。

推敲中に間違えて投稿したり、一旦消して推敲してたら保存していたメール自体消してしまつてorz

慌てて書き直しました……重ね重ね、今回は本当に申し訳ありませんでした。

第16話 それぞれの思い？

春季達が泊まっている海鳴温泉の近辺は木々に囲まれている。

そんな森にそびえた大木から伸びる太い枝の上に、フェイトはバル
ディッシュを抱えて座っていた。

普通の人が見たならば幼い少女がどうやってこんな高い所まで登っ
たのか疑問に思うだろう。

だが、地球において異能である魔法の知識を持ち、それをを用いる術
を持つ彼女にとって難しくはない。

飛ぶだけならば比較的簡単な飛行魔法を使っただけだ。

そんなフェイトとはいえ魔力によって離れていても会話を可能に
する『念話』を己の使い魔と交わしていた。

フェイトからは探索魔法によるジュエルシードの探索過程と発見の
目処が立った事を。

アルフからは白い魔導師と接触した事。

そして、高町春季と偶然出会ったという事。

「ハルキが？」

報告を聞いていたフェイトは思わず肉声で問い返してしまった。

初歩的なミスに気付き、誰も見ていないというのに頬をほのかに赤
くしながら念話に切り替える。

「ハルキがなんでここに？」

「親しい人達で旅行だって。いちおう、夜は部屋から出ないように
釘は刺したよ」

ならば安心だ。
少なくともジュエルシールドが発動したとしてもそれに巻き込まれる事はない。

白い魔導師もアルフが警告していても、きっと出てくるはずだ。

……友達を危険な目に遇わせたくはない。

友達となったあの日からポケットに仕舞って常に持ち歩いている青い石に触れる。

(暖かい……)

指先に伝わるほのかな暖かさ。

『返す』といったからには春季に返さないといけないのだが、なんとなくこの石は持っていたかったり

勘違いから始まった友達との出会いを与えてくれた石を。

(……そうだ。そのために)

この暖かさをくれた人を傷付けない為にも、一刻も早くジュエルシールドを集めなければならぬ。

それがフェイト本来の目的にも繋がるのだから。

アルフとの念話を切り、フェイトは集中に集中を重ねて探索魔法の行使を続けた。

奇しくも白い魔導師と黒い魔導師が心配する対象は同一人物だったりするのだが、それを知る由もない二人の魔導師は再び激突する。
勝負は、夜。

子供達が眠る客間で布団を被りながらも、なのはは眠れずにいた。湯上がりで向かった卓球もみんなでしたお土産選び、ファリンから読んでもらった本の内容も頭には入ってはいない。

理由は温泉上がりに出会った橙色の髪を持つ美女からの念話。

あの黒い魔導師との関係を匂わす彼女によって、嫌が応にも黒い魔導師について考えてしまう。

(あの子、どうしてジュエルシードを集めているんだろう……？
あんなに悲しそうな瞳をしているのに……)

思い浮かべるのは少女の真紅といえるほど紅く、綺麗な瞳。
その奥に陰りが見えたのはなのはの気のせいだろうか。

(ううん、気のせいなんかじゃない)

初めて会った時、なのはに向けて雷撃が放たれた際に彼女は確かに『ごめんなさい』といったのだ。

きつと、本当は優しい少女のはずだ。

『気のせい』で後悔するのは、あの大樹の一件だけで十分。

(まずはお話を……する前にお名前を聞かないと！)

ジュエルシード探索という大きな目的の中でなのはが決めた小さな目的は、ほんの少しだけ彼女の気持ちを軽くした。

『なのは』

『ユーノ君？』

そんな時、なのはの頭に直接聞こえるユーノの声。

『……なのは、やっぱりこれからは』

『ストップ！』

『えっ？』

ユーノがいったこれからは。この先の言葉はすぐに思い付き、いわせる訳にはいかない。

布団から身体を起こし、なのはは右隣で眠る春季の布団からこちらを見つめるユーノを見やる。

『ユーノ君、一人でジュエルシードを探すっていうんでしょ？』

凶星だったのか、ユーノは黙り込んでしまった。

『ダメだよ、そんなの』

『でも……危ないよ！ 本当に、今更で、なのはには本当に感謝しているけど……』

『危ないからこそ、だよ』

そういつてから隣で眠る春季、その横に眠るアリサ、なのはの左隣で眠るすずかの顔を順番に見て微笑む。

『危ないからって私がジュエルシード集めを止めちゃったら皆が傷付いちやうかもしれない。……もちろん、ユーノ君だって』

『僕、も？』

『うん。そんなの、私は嫌だよ』

『なのは……』

高町家の人々は基本的に頑固者だ。

そして、決意を済ませているなのはを止めるのはユーノには難しかった。

『ごめん、なのは。これからも僕を手伝ってくれるかい？』
『うん！もちろんだよっ！でも、次一人でなんていったら怒るからね？』

微笑み合い、なのはとユーノは改めて約束を交わした。

静かに流れる川で月明かりを浴び、怪しく輝くジュエルシードがあった。

災厄の種は穏やかな空間と時間さえ無視して己が持つ力を解放してしまっ。

それにいち早く気付いたのは誰だったのか。

「来た　行くよ、アルフ」

「りょーかいつ！」

目の前で発動した力を観察している黒い魔導師とその使い魔か。

『なのは！』

『うん、ジュエルシードだね！』

眠りながらも発動した力を察知した白い魔導師と彼女に魔法の力を与えた若き魔導師か。

「ジュエルシード……なのかな」

偶然、眠りから目覚めてトイレに行っていた魔法が使えない少年か。

運命の齒車はゆっくり、ゆっくりと確実に回っていく。

姉と友達。

弟と黒い魔導師。

友達と白い魔導師。

各々がそれぞれに違う関係と感情を持つ少女達と少年。

彼らの邂逅の時はジュエルシードと神のみぞが知っている。

それはきつと、遠くはない　のかもしれない。

第16話 それぞれの思い？（後書き）

凄く久しぶりな投稿です。

お待たせしてしまい、申し訳ありませんm(_____)m

しかもあまり物語が進んでいないしまだ温泉編orz

次で温泉編は終了する予定です。

うーむ……スランプなのか、指がまったく動きませぬ。

書きたいのと思ったように書けないジレンマが鬱陶しい！

次話を早くお届けするためにも、精一杯頑張ります(。◡。)(

第17話 友達の敵と姉の敵？

ジュエルシードの発動を関知したのも、そしてその時に目が覚めていたのも偶然だった。

「……………どうしよう」

トイレに起きてきた春季は、感じたジュエルシードの反応に足を止めた。

今まで使っていないかった 存在を知らなかったともいえる 魔法の力。 魔

友人の変貌から始まった魔法とフェイトとの出会いが、春季の中にあつた魔法に関する反応に対しての知覚能力を高めていた。

未知の力に対する興奮と魔力の流出から彼の精神が不安定になっているのだから、いい事ばかりではない。

もつとも、春季自身は自分が怒りやすくなっている理由に思い至る事は出来ていないのだが。

「どうしよう……」

再度眩き、春季は本能が鳴らす警鐘から不安になる胸を押さえた。

知覚したからといってその場に行くかどうか、仮に行つたとして何が出来るといふのか。

春季の脳裏に過るのは昼間に旅館で出会つたアルフからの部屋から出るなという忠告。

あの場では御神流に対しての苛立ちと自分の無力さから頷いてしまつたが。

(本当にいいの?)

自分に問い掛ける。

日課になっっているジュエルシード探索だって、春季が見付けた所でフェイトかアルフに念話で伝える事しか出来ない。

そして、今回はすでに発動しているジュエルシードだ。

もしかしたら旅館にいるという魔導師だって来ているかもしれない。

ならば自分が行ってもむしろ邪魔になるだけ。

そうだ。

行く必要なんか無いし、

「意味もない。……なんて、わかってるのになあ」

零れてしまう笑みをなんとか堪える春季の足は旅館の外へと向かっていった。

自分よりも圧倒的に強いフェイト達を心配しているなんて、滑稽すぎて逆に笑える。

でも、友達が危険なモノと対峙しているのに情眠を貪るなど春季の性格が許さなかった。

幼さ故の無謀な行動かもしれない。

それでも、警鐘を鳴らし続ける本能を無視した春季の足は決して止まらなかった。

春季が着の身着のまま客間を抜け出したのと同時期。

急ぎながらも静かに私服へと着替え終えたのは、ふと違和感を覚えた。

「あれ？」

『どうしたの？　なのは』

「はる君がいない……？」

念話に対して、なのはは肉声で呟いた。

その視線の先はもぬけの殻となった春季の布団。

『こんな時間に起きたなんて……トイレかな』

ユーノのある意味楽観的な予想とは裏腹に、なのはの小さな胸に不安が蔓延る。

ジュエルシードが発動している時にいないなんて……

トイレに行っただけならいい。

だが、万が一、リンカーコアを持っている春季がジュエルシードの発動に気が付いてしまったとしたら？

その反応の場所へ向かってしまったとしたら？

いや春季がジュエルシードを、魔法を知っているはずがない。

ユーノに念話で呼び掛けられて魔法の存在を知ったなのはとは違い、春季はあの運命の夜に遭遇はしていない。

だから、きっと大丈夫。

心にそっぴい聞かせる。

急ぐユーノに少し時間をもらいなのはは客間のトイレへと向かった。手汗で滑るドアノブをやたら騒ぎ立てる胸を押さえつつ、彼女は扉を開いた。

ノックする、なんて発想はなかった。

そして、その必要も。

「なっ、なんで……………」

扉の向こう側のトイレは暗闇に包まれていた。

暗闇の中で用を足す者はいない。少なくとも春季は電気を付ける。

そう。深夜に起きた少年が向かう唯一といってもいい場所に、彼の姿はなかった。

なのはの視界がぼやけ、身体が崩れそうになったのは一瞬。

すぐに彼女は用が無くなったトイレを後にする。

そして、直ぐ様ユーノへ念話でジュエルシードの元へと向かう事を伝えた。

焦燥と不安を抱えながら、空を駆けるなのはのフライアーフィンの行使は今までにないほど緻密で無茶なものだった。

すでに展開されたレイジングハートは、その無茶をする主を的確にサポートしている。

なのはの焦りはデバイスにまで伝わっていた。

高町なのはが恐れるのは何よりも孤独。

幼い頃の孤独から持つてしまったトラウマを和らげ、なのはを頼り、なのはを愛してくれる春季。

そしてまた、類い稀なる魔法の才能を持つなのはをユーノは頼ってくれている。

孤独から遠ざける弟と魔法は、高町なのはを構成するにはなくてはならない存在だ。

そして、その弟が魔法のせいで危険な目に遇っているかもしれない。

『なのは！ まだハルキがジュエルシードに気付いたとは限らないよっ！？』

『……わかってる。わかってるけど！』

なのはの肩に掴まるユーノから届く念話。

確かに、それはなのはにとっては最高の結果だ。

しかし、『もし』を際限なく想像してしまうなのはのスピードは緩まない。

そして唐突に、目印になっていたジュエルシードの発光らしき青く立ち上る光の柱が消失した。

それが意味するのは

「あれは！」

「きつと、あの子が封印したんだ」

ジュエルシードが封印されたからに違いなかった。

「一先ずは安心……だけど」

「とにかく、急ぐね！」

再び飛行を開始する。

まだ確かめなければならない事が残っているのだ。

一足先にジュエルシードの位置を特定し、待機していたフェイトとアルフはその封印を完了させた。

「これで三つ目」

「さすが、私のご主人様だねえ」

上機嫌で手摺に腰を掛けているアルフに微笑み、フェイトはありがとうと応えた。

一先ずの目標を達成し、次にフェイトが考えたのは白い魔導師と春季の事だった。

アルフが旅館で遭遇した魔導師はジュエルシードの発動に気付いているはずだ。

すでにこちらに近付く大きな魔力を感知しているし、間もなく到達するだろう。

そして、春季。

彼は魔法にあまり馴染んでいない。

ジュエルシードに気が付かなかったかもしれないし、もしかしたら気が付いたかもしれない。

深夜といってもいい時間なので眠っていてくれるのがベストだ。

「ハルキ……ジュエルシードに気が付いたかな」

「んー、ハルキは魔導師じゃないからねえ。気になるんなら聞いてみるかい？ ……っと、フェイト。お客さんだよ」

そういったアルフの視線の先には空から降り立つ白い魔導師の姿があった。

ここまで来るのによつぽど急いだのか、少女は肩を上下させて荒い呼吸を繰り返している。

そして、呼吸はそのままにキョロキョロと辺りを見渡した。

「はあ……はあ……」

「ああら、ああら。来ちゃったんだ。忠告はしたよねえ？」

獰猛な笑顔で威嚇するアルフだが、白い魔導師はそれすら眼中にないようだ。

念話をするなら今の内か。

白い魔導師が来てしまったからには、前回のごとく戦いになるだろう。

その為にも懸念事項を解消しておきたい。

『ハルキ、聞こえる？』

数瞬の後。

彼の声は返ってきた。

『フェイト？　もしかして、もう終わったの？』

『うん。終わったけど、まだ部屋から出ないで』

『えっ！？』

驚いていた春季との念話を切る。

時間があつたならキッチンと説明したかったが、そうもいつてられない。

狼の姿となったアルフと白い魔導師の使い魔らしき小動物が姿を消したのだ。

『ごめん、フェイト！　跳ばされた！』

『わかった。後で合流しよう』

『了解！　気を付けてね、フェイト！』

『アルフも。無茶しないで』

念話を終わらせ、フェイトは白い魔導師の方へと向き直った。

「結界魔法と強制転移魔法。いい使い魔を持っている」

呟き、バルディツシユを構える。

「ユーノ君は使い魔つてのじゃないよ。私の、大切な友達」

「……そう」

友達という言葉に一瞬だけ反応しそうになる。が、今は目の前の状況に集中しなくては。

「それで、どうするの？」

「……話し合いで解決出来ないかな」

「無理だと思う。私はロストログアの欠片、ジュエルシードを集めなければならぬ。あなたも同じ目的なら、私達はジュエルシードを賭けて戦うしかない」

譲れないモノがある。

フェイトは母の為にジュエルシードを渡す訳にはいかない。

そして、友達を守る為にもこれからジュエルシードを集め続ける。

「そういう事を決めつけないために！話し合いって必要なんだと思うー！」

なぜだろう。

この白いバリアジャケットを纏う女の子に、春季の面影を重ねた。警戒しながらも会話をし、やがて友達になっていた少年。

「……そう、かもしれない」

「じゃあー！」

「でも。きつと話はずかしくない。私は絶対にジュエルシードを集める」

場を支配する沈黙。

それを破ったのは白い魔導師だった。

「……………どうしても、無理かな？」

「私と、あなたの目的が一致する限り。なにも変わらない」

話は終わりだ。ジュエルシードはすでに確保したのだ。ここまで付き合ったのは、いわばフェイトの気まぐれ。もうここにいる必要はない。

高速の一撃を繰り出してからの戦場からの離脱。

作戦を即座に思い付き、それを実行に移し、瞬く間に白い魔導師の背後へと回り込んだ。

高速移動を可能とするブリッツアクションという魔法だ。

勢いをそのままに戦斧状のバルディッシュを横風ぎに振った。

今、戦いは再び始まる。「はあ……………はあ……………っ」

目印にしていた青い光柱が消え、春季は纏れそうになる足を懸命に動かしていた。

気になるのはすでに途切れたフェイトの念話。

ジュエルシードの封印は終わったというのに部屋から出るな。きつと、現れたのだろう。

(フェイトじゃない、別の魔法使い……………！)

まだ見ぬもう一人の魔法使いに対して春季が抱く感情は曖昧なものだった。

母親の為にと危険なジュエルシードを集めているフェイト達の邪魔をする嫌な人。
かと思いきや、そのジュエルシードを街や人に被害が出ないように集めてくれているかもしれないと、希望的観測もしている。

春季としては見知らぬ魔導師よりも友達であるフェイトに回収してもらいたいと思っているので希望的観測も意味はない。

「あつ、あれって！」

そんな思考を続けていた春季の視界に入ってきた上空に輝く黄色の魔力光と桃色の魔力光。

桃色の方は見た事がないが、黄色の魔力光はフェイトのものだ。

おそらく戦闘が始まったのだろう。

桃色と黄色の光が一際眩くなる。

「急がなく　！？」

急がなくちゃ。

そう呟こうとした春季だったが、不意に感じた胸の痛みに崩れる様に膝を着く。

「なっ……………にこれ……………」

喘ぐ様に言葉を吐き出す。

春季は知らぬ事だが、彼が痛みを感じているのは魔導師達の核とも呼べる器官『リンカーコア』がある部位だった。

痛みを我慢しつつ、顔を上げると桃色と黄色の魔砲がぶつかり合っ

ている。

(あの桃色の光のせい、かな……)

奇妙な確信を抱く。野性的な勘といってもいい。

痛みで深く思考できない事も重なり、春季はノロノロと歩き出した。痛みの元凶を知る為に。

ユーノがその人を発見できたのは、現在地が彼が張った結界内だったからだ。

なのはと黒い魔導師との戦闘を呆然と見ていると、結界に侵入した者の存在に気付いた。

(これは……まさか、彼か!?)

同じく戦闘の行方を見ていた狼を確認し、彼は魔力で出来たサーチャーを飛ばす。

なのは達が放った魔砲の激突によって照らされた森は夜にも関わらず視界はしっかりと確保出来た。

(……いた!)

サーチャーの映像にはユーノが思った通りの人が映っていた。大量の脂汗を顔に浮かべ、苦悶の表情で歩く春季の姿が。

(って、このままじゃ)

ユーノと狼がいる場所にすぐに来てしまう。

首元に黄色の魔力刃を突き付けられてしまっているのはの安否と、

レイジングハートから排出されたジュエルシードの行方を気にしつつ、どうすればいいか考えるが

(ダメだ！)

もう彼はすぐそこに

「ん……？ この匂い」

気付かれた！

ならばせめて危険を知らせようと声を張り上げる。

「ハルキ！」

フレットと狼の声が重なった。

それは決着が着き、大地に降り立った白い魔導師と黒い魔導師も同様だった。

「はる、君……？」

「ハルキ？」

木々の後ろから姿を現したのは、この場で唯一敵味方関係なく面識を持つ高町春季であった。

己の名前を突然呼ばれ、これまた突然痛みがなくなって楽になった身体を木に預けて辺りを見渡す。

「……………」

まず最初に視界に入ったのは高町家のペットであるユーノとオレン
ジ色の毛並みを持つ……大きな犬？
苦手な犬の姿に思わず逃げ出したくなるのを堪え、視線をその奥へ
そして驚愕する。

「なんで……………?」

今度こそ春季は逃げ出したくなった。

ともすれば春季以上に驚愕に目を見開いている白い魔導師 高町
なのは の姿と黒い魔導師 フェイト・テストロッサ がそ
こに居たのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525k/>

魔法少女リリカルなのは ～ある少年の魔法的な日々～

2010年12月10日21時09分発行